

## 私 訳

## 『ガラテヤの信徒のみなさんへ』

阿部 包\*

## 解説

『ガラテヤの信徒のみなさんへ』は、原題を PROS GALATAS といい、「ガラテヤの人々へ」、「ガラテヤの方々へ」、「ガラテヤのみなさんへ」がむしろ直訳である。周知のとおり、従来は「ガラテヤ人への手紙」(協会訳)、「ガラテヤの信徒への手紙」(新共同訳)と訳されて来た。この手紙は、最もよく用いられるギリシア語テキスト校訂版であるネストレーアラント版で 11 頁ばかりの比較的短いものであるが、所謂「信仰義認」や「キリスト者の自由」などの、その後のキリスト教にとって極めて重要なテーマを含むことから、これまで重視され、よく読まれてきたものである。

この私訳は、ネストレーアラント版に基づく新しい翻訳であるが、訳文に移る前に、この手紙を読む上で必要最小限の基礎的情報を提供しておきたい。

## &lt;ガラテヤとは&gt;

まず、ガラテヤであるが、場所は小アジア、今日のトルコ中央部にあるアナトリア高原に位置する。この地は、古来多くの民が興亡を繰り返す舞台であった。主なものを列挙すると、ヒッタイト (b.c.e.20c.末～13c.末)、フリュギア (b.c.e.9c.～8c.)、アケメネス朝ペルシア (b.c.e.546～333)、マケドニア (b.c.e.333～323)、セレウコス朝シリア (b.c.e.ca.300～64) となる。しかし、ガラテヤという呼称について言えば、前 3 世紀に、西方のガリア地方からケルト系の諸部族がこの地に侵入してきたのが、そもそもの始まりである。そして、紀元 25 年に、アウグストゥスになって間もないオクタヴィアヌスが多く民族が住むフリュギア、ピシディア、リュカオニア等の諸地域を統合してローマの属州、ガラテヤ州とした。(ピシディアの) アンティオキア、イコニウム、リュストラ、デルベは、彼が創った殖民都市である。

\* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科 教授

ちなみに、ケルト人全体として見れば、彼らの勢力の絶頂期は、前4世紀初頭から前半にかけて、彼らがローマを占領した頃とされる。したがって、彼らが小アジアに侵入しそこにガラテヤ王国を築いたのは、局所的な事例に過ぎず、民族全体の衰退は既に後戻りできないところまで来ていた。

従来、パウロがこの手紙を宛てた諸教会がこの属州にあったか（南ガラテヤ説）、それとも、属州が成立する前からガラテヤと呼ばれていたガラテヤ地方にあったのか（北ガラテヤ説）が、議論されてきた。しかし、今日では、後者が有力視されており、名宛諸教会は、ペッシヌス、アンキュラ、タヴィウムなどの北の諸都市にあった確立が高い。ちなみに、この地域の南東にはカッパドキア州が、その南にはキリキア州が位置し、パウロが生まれたのは後者の中心都市タルソスであった。

#### <ガラテヤ地方の宗教的環境>

パウロ当時、ガラテヤ地方のアンキュラ（現在のトルコの首都アンカラ）には、ローマとアウグストゥスに奉げられた皇帝礼拝のための神殿があったが、これは、アウグストゥスによって建設が開始されティベリウス帝のもとで、紀元19/20年に完成したものである。ペッシヌスにもピシディアのアンティオキアにも、同様の神殿が次々に創られた。この種の宗教的施設は、決まって先住民の聖域に建てられたが、これは古今東西普遍的な現象と言ってよい。

先に、前3世紀にガリア地方からケルト系の諸部族が侵入してきたと書いたが、ガラテヤ（Galatai）というギリシア語の呼称自体、同じギリシア語のケルト（Keltoi）やラテン語のガリア（Galli）と同義の言葉である。ガラテヤの信徒のすべてがケルト系住民であったとは言えない。しかし、抑圧された民として、ローマの皇帝礼拝ではなく、帝国公認の宗教であるユダヤ教に共鳴してシナゴグに通うケルト系住民の姿を想像することは許されるだろう。

パウロ時代には、ケルト系の住民も既にローマ化を余儀なくされていて、支配階級（ドルイド階級と騎士階級）と奴隷に等しい民衆という二極構造に基づくかつてのドルイドの威信も、その凋落の道を歩んでいたことは確かである。しかし、政治や司法の領域における威信の失墜が宗教の領域にまで直ちに及ぶとは限らない。民衆の世界観や信念体系には、不死なる神々、靈魂の不滅、輪廻転生、世界の不滅、人間や動物の生け贄だけでなく、天空の天体（月や星辰や太陽）、山や川、泉や沼地、オークやヤドリギなど、宇宙や自然界の靈的諸力（地、水、風、火）が、それぞれ場を占めていたであろう。彼らは、特に天体への信仰、観測に基づいて、春分、秋分、夏至、冬至を中心とする祭事暦を作成し、それに従って生活していた。

また、彼らを政治的に支配したローマ人は、かつてギリシア人のパンテオンに自分たちのそれを重ね合わせたように、今やケルト人の神々をも自分たちの神々と混交させることをとおして、ケルト人のローマ化を推進した。例えば、ローマ化された後の

ケルトの太陽神は、そのアトリビュートとして、元来の車輪の他に、ローマ人の天空神ユピテルのアトリビュートたる雷電・稲妻を持つことになったのである。こうして、ケルト人は、自身の神々も含めてローマ化されて行った。

古典古代の著述家が伝えるドルイド関連資料によれば、彼らドルイドたちが行なうのは、神事、公私にわたる生贄、宗教解釈であり、また公私にわたる論争の裁決、殺人や境界に関わる論争の際の賠償や罰金の決定等である（カエサル『ガリア戦記』*Commentarii de Bello Gallico*、第6巻13節）。

そして、ドルイドたちの教えは、靈魂の不滅、輪廻転生、天体とその運行、不死なる神々の力と権能などに関わるものとされ（同、第14節）、彼らも「ほかの人々も靈魂と世界が不滅だというのが、ただし火と水がそれらを凌ぐことがあるとされる」（ストラボン『地理誌』*Geographika*、第4巻、第4章、第4節）。

また、ガラテヤ地方には、「ドリュネメトス」と呼ばれるケルト人の神聖な集会所があったと言われ（同上、第12巻、第5章、第1節）、ガラテヤ人の間では、「人間の靈魂は不滅で、定められた年月を経ると別の身体に入り込んで生き返る」と信じられており、ドルイデスと呼ばれる「格別に敬われる」人々は「神学者や哲学者のよう」である（ディオドロス・シクルス『歴史叢書』*bibliothēkē historikē*、第5巻）。

＜ガラテヤの信徒たちの状況＞

ローマ帝国において、ユダヤ教は公認宗教の地位を獲得していたので、この地域の都市にも、ユダヤ人居住区とシナゴグがあった。パウロの宣教活動が開始されるのは、常に、こうしたシナゴグであった。シナゴグには、ユダヤ人、異邦人改宗者（*prosēlytai*）、異邦人共鳴者（「神を畏れる人々」*sebomenoi*）が集まってきていた。われわれの手紙の内容が示すところでは、この手紙の名宛人であるガラテヤの諸教会の信徒たちは、このうちの異邦人共鳴者であった。

そして、当時の彼らの状況は、パウロが彼らにもたらした福音によって実現した自由をまさに放棄しかけている、という危機的なものだった。この危機に対する応答が、この手紙なのである。ガラテヤの信徒たちを危機に陥れたのは、宣教という共通の戦線でパウロと競合する者たちで、エルサレム教会に連なるユダヤ人（反対者）であった。彼らは、パウロが旅立った後からガラテヤの諸教会に潜入してきて、ユダヤ人の割礼こそがパウロの福音を完成するものだと主張し、その影響でガラテヤの信徒たちが割礼を受けかねない勢いだったのである。しかし、極めて危険な状況だったとはいえ、まだ決定的な事態に至ったわけではないことは、パウロが口述筆記したギリシア語原文ではたった四つの単語からなる短い文章（3章4節）がいみじくも明らかにしている。その文章は、*ei ge kai eikēi* というものであるが、逐語的には「もし、実際に…ならば、無駄に」となる。省略されている幾つかの言葉を補ってパウロが言わんとしている文意を表現すれば、「もし、あなたがたが、実際、肉によって完成すれば、あなたがたがした体験も無駄になってしまいますよ」となるだろう。「肉によって完成す

る」は、パウロの反対者が信徒たちに割礼を勧めるために使った誘惑的なキャッチフレーズである。信徒たちがした体験は、キリストが実現した自由体験である。

#### <二つの困難な問題>

『ガラテヤの信徒のみなさんへ』（以後、ガラテヤ書と略記）を読む場合に、読者が直面する困難な問題が幾つかある。それらのうち、ここでは特に二つの問題に絞って、簡単に解説しておきたい。

まず、第一が、パウロが『ローマの信徒のみなさんへ』（以後、ロマ書と略記）で比較的詳細に論じる、所謂「信仰義認」に関わる発言についてである。ガラテヤ書では、2章15節～3章29節、特に2章16節、3章22節に極めて簡潔に述べられている。私訳で、2章16節、3章22節の順に引用しよう。

「[しかし] わたしたちは、人が義とされるのは律法の業によるのではなく、イエス・キリストの信仰をとおして以外にはあり得ないと知ったので、わたしたちもまたキリスト・イエスを信じたのです。それは、キリストの信仰によってわたしたちが義とされるためであって、律法の業によってではないのです。なぜなら、律法の業によっては、人は誰ひとり義とされないだろうからです。」

「しかし、聖書は、あらゆるものを罪の支配下に一緒に閉じ込めました。それは、約束がイエス・キリストの信仰に基づいて、信じる人々に与えられるためでした。」

問題となるのは、「イエス・キリストの信仰」 *pisteis Iēsou Christou* (2章16節と3章22節に一度ずつ) と「キリストの信仰」 *pistis Christou* (2章16節) という表現である。新共同訳等を見ても分かるとおり、従来は、それぞれ「イエス・キリストへの信仰」、「キリストへの信仰」のように訳されてきた。*Iēsou Christou*、*Christou* はともに単数、属格であるが、実はこれが目的格的に使われているのか、主格的に使われているのか、というのが一つの大きな問題なのである。残念ながら、最終的な決着は未だについていない。しかし、これは、信仰というものの根源的な理解を左右する大問題だから、致し方ない。

これまでの議論は主としてローマ書3章22節の「イエス・キリストの信仰」 *pistis Iēsou Christou* をめぐってなされてきたが、今日まで優勢なのは、新共同訳が採用している目的格的属格と解する立場である（ちなみに、この箇所の新共同訳は「イエス・キリストを信じることにより」となっている）。しかし、わたしは、先にローマ書の私訳でも表明したとおり、この立場とは反対に、主格的属格と解釈すべきだと考えてい

る。こう解釈する代表格は、太田修司、清水哲郎両氏であるが、内容的には後者の理解が最も妥当性が高いと思う。

つまり、「イエス自身が取った態度」(清水)としてのイエスの信仰と解するのである(26節には、*pistis Iēsou*の属格形 *pisteōs Iēsou* が現れる)。パウロは、このような意味のイエスの信仰を、続く24節～26節で自ら敷衍して、言わば解説してくれているのであるが、そこには、「イエスにおける贖いをおした神の恵み」、「その血における信仰をおした宥めの供え物」という言葉が用いられている。そして、それは神が「ご自身の義」を示すため、「今というこの時にご自身の義を、すなわちご自身が義しい方であり、またイエスの信仰に依る者を義とする方であることを示すため」だった、と言われているのである。

イエスが自分自身を引き渡した十字架刑に極まった死こそ、イエスの信仰 (*pistis*) の具体的な表現形態、証しなのである。この信仰は父の意志に対する完全な忠実さ (*pistis*) であるが、先取りして言えば、父の意志に対する忠実さ (*pistis*) を生きる限りにおいて、われわれの生についても同じ言葉、信仰 (*pistis*) を用いる可能性が開けるのである。イエスの十字架が愛の極限形態であったように、われわれの信仰もまた、愛をとおして働く(ガラテヤ5章6節)のである。

第二の問題は、4章3節、9節に現れる *ta stoicheia* が何を意味するか、である。前者は、*kai hēmeis, hote ēmen nēpioi, hypo ta stoicheia tou kosmou*、「わたしたちも、未成年だったときには、世界の諸々の要素の支配下に隷属させられていました」。後者は、*pōs epistrephete palin epi ta asthenē kai ptōcha stoicheia hois palin avōthen douleuein thelete*；「なぜ、再び、あの弱々しくみずぼらしい諸々の要素に逆戻りして、またもう一度、それらに隷属しようと望むのですか」。

この *stoicheia* は、*kosmos* つまり世界あるいは宇宙を構成する最も根源的、基本的な諸要素を指す言葉である。それらは、ときに「地、水、風、火」(四大、四大精霊)とも呼ばれ、支配的な力を持つ霊的存在と見なされた。われわれの箇所との関連で、8節には「かつて、あなたがたは神を知らずに、本性上神ではない神々に隷属していました」とも言われている。パウロは、ガラテヤの信徒たちが、自分が伝えた福音を受け入れる前は、「本性的に (*physei*)」、あるいはもともと神ではないものどもをあたかも「神々」として崇めて、その支配下に隷属していた、と指摘しているのである。さらに、9節を挟んで10節で、パウロは、「日、月、季節、年(などの暦)を、あなたがたは注意して守っています」と言っている。おそらく、これらは、春分、秋分、夏至、冬至を中心として構成されていた祭事暦であろうと思われる。

先に、わたしが＜ガラテヤ地方の宗教的環境＞で指摘したケルトの人々が信じていたと考えられる宗教に関わる内容を想起していただきたい。枢密院によって文書化されていたローマの公的な暦にも宗教行事の暦が盛り込まれていたと言われる。ガラテ

ヤの信徒たちがユダヤ教に共鳴しつつ、守っていた祭事暦は、ケルトの神々とローマの神々が混交した諸神を祀る祭事を記したものであったであろう。

ユダヤ教も、よく知られるとおり、例えば、カナンの地に定着する過程で、先住民の農耕儀礼に由来する祭事を取り込んで、自らの祭事とするなど、異教的祭事をユダヤ教化してきた宗教である。

ガラテヤの信徒たちが魔術にでも掛かってしまったかのように、受け入れかけている割礼は、彼らを扇動する反対者が主張するように、パウロが福音として伝えたことを完成するものなどではなく、折角、イエスの信仰によって自由にされた、その自由を放棄し、以前の「あの弱々しくみすばらしい諸々の要素に逆戻りして、またもう一度、それらに隷属」することに他ならない、とパウロは説得しようとしている。その根拠として、彼が付け加えているのが、既に信徒たちが再び守り始めていたであろう祭事暦だった。彼らは、それを「信仰の完成」に伴うユダヤ的な祭事暦と受け止めていたであろうが、パウロにとって、イエスの信仰が既に相対化してしまった瑣末な遵守事項を守るとは、逆戻り以外の何物でもなかったのである。敢えて言えば、イエスの信仰は、一方では異邦人を異教的な種々の仕来りから、他方ではユダヤ人をユダヤ的な種々の仕来り解放したというのが、パウロが自らの召命体験の中で啓示されたと信じたことであった。

#### <パウロが福音として伝えたこと>

最後に、ガラテヤの信徒に向けてパウロが伝えた福音について、概略的にまとめておこう。パウロはファリサイ派でトーラー（教え、律法）の研鑽を積んだ者であった。そのような者として、彼は、神の意志の体現としての律法を厭くまでも聖なるものとして留保する。それにも拘らず、人間自身の神からの離反のゆえに、そこに示された神の意志が人間の業によって十全に満たされることは不可能になったのであった。だから、律法の有限性は、むしろ、律法それ自体の有限性というよりは、人間の有限性と言った方が正確だと思われる。

ちなみに、パウロはユダヤ人であるから、異邦人が生まれながらに罪人であるという前提を、当然のこととして、彼らの同族と共有している。単純化して言えば、異邦人も、ユダヤ人も、（異邦人は所与として与えられている良心に反して、ユダヤ人は恵みとして与えられた律法、つまり神の教えに反して）つまりは、如何なる人間も、自らの力では神から義と認められることが決定的に不可能になったこの世界に、神は、その息子を、イエスという姿で派遣した。イエスは、こうして、罪と死が支配するこの世界に、やって来たのであるが、神がその息子を派遣した目的は、神自身が自らの義をイエスにおいて指し示すことであった。それが、イエスの信仰、つまり、イエスが十字架上で示した、父なる神の意志に対する十全な忠実さ（*pistis*）なのである。このイエスの信仰によって、人間のゆえに滅びを免れ得なかったはずの被造物全体に自

由が宣言された。これが、パウロが福音として伝えた事柄と言っていい。

われわれ人間に問いかけているのは、われわれ自身の日常的な生の場面で、その自由をどのように具体化するか、ということである。それに対してパウロが提示するのは、「愛をとおして互いに仕え合いなさい」という勧告であり、これを根拠づけるのは、福音書でもお馴染みの「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」というレビ記 19 章 18 節後半部からの引用である。これが、律法に示された神の意志を十全に満たすことなのである。

#### <翻訳上心がけた点>

なお、翻訳に際して心がけたのは、主として、原文のコイナー・ギリシア語本文<sup>1</sup>と対照しながら読んで分かり易いこと、日本語としても自然に論理展開を追うことができること、である。訳注はページ毎の脚注形式で付すが、必要最小限にとどめる。

#### <解説に関する参考文献>

月川和雄「ドルイドとギリシア・ローマ世界」(中央大学人文科学研究所編『ケルト 伝統と民族の想像力』、中央大学出版部、1991、17～44 頁。

——「ケルト民族誌のなかのドルイド」(中沢新一・鶴岡真弓・月川和雄 編著『ケルトの宗教 ドルイディズム』、岩波書店、1997、25～50 頁。

——「二〇世紀のドルイド研究史」、同上、269～323 頁。

——「ドルイドとギリシア・ローマ人—古典文献の中のドルイド像」、同上、325～371 頁。

ミランダ・J・グリーン／井村君江 監訳・大出健 訳『図説 ドルイド』、東京書籍、2000。

Miranda J. Green (ed.), *The Celtic World*, Routledge, 1995.

#### <本文訳出に際して参照した主たる文献(網羅してはいない)>

A.Rahlfs(ed.), *Septuaginta*, Württembergische Bibelanstalt Stuttgart, 1971.

W.Bauer/K.&B.Aland, *Wörterbuch zum Neuen Testament*, Walter de Gruyter, 1988<sup>6</sup>.

G.Kittel and G.Friedrich(eds.)/G.W.Bromiley(tr.), *Theological Dictionary of the New Testament* (TDNT), 10 vols., W.M.B.EERDMANS, 1979<sup>10</sup> (1964<sup>1</sup>～1976<sup>1</sup>).

荒井献/H.J.マルクス (日本語版監修)『ギリシア語 新約聖書訳義辞典』全3巻、教文館、1993～1995.

岩隈直『新約ギリシア語辞典』山本書店、1975<sup>6</sup> (1971<sup>1</sup>) .

---

<sup>1</sup> NESTLE-ALAND, *NOVUM TESTAMENTUM GRAECE*, Ed.XXVII, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1993<sup>27</sup>.

*Computer-Konkordanz zum Novum Testamentum Graece*, Walter de Gruyter, 1980.

バルバロ - デル・コル訳 (『口語訳 旧約新約 聖書』、ドン・ボスコ社、1968<sup>4</sup> (1964<sup>1</sup>)、  
「バルバロ訳」と略記)

協会訳 (旧約 1955 改訳、新約 1954 改訳、日本聖書協会)

新改訳 (1963、日本聖書刊行会)

新共同訳 (1987<sup>1</sup>、2003、日本聖書協会)

フランシスコ会聖書研究所訳 (フランシスコ会聖書研究所訳注『新約聖書』、1980<sup>1</sup>、  
改訂版 1984<sup>1</sup>、1994<sup>1</sup>、中央出版社=現サンパウロ)

柳生直行訳 (1985<sup>1</sup>、1994<sup>5</sup>、新教出版社、「柳生訳」と略記)

本田哲郎訳 (『ローマ/ガラテヤの人々への手紙』、新世社、2001、「本田訳」と略記)

青野太潮訳 (新約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、2004、「青野訳」と略記)

佐竹明『ガラテヤ人への手紙』(現代新約注解全書、新教出版社、1984<sup>1</sup>、1980<sup>3</sup>、「佐  
竹訳」と略記)

山内真『ガラテヤ人への手紙』(日本キリスト教団出版局、2002、「山内訳」と略記)

原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』(現代新約注解全書 別巻、新教出版社、2004、「原  
口訳」と略記)

蓮見和男『ガラテヤ書・エペソ書』(聖書の使信 私訳・注釈・説教、新教出版社、2001)

H. D. Betz, *Galatians*, Hermeneia, Fortress Pr., 1979.

F.F.Bruce, *Commentary on Galatians*, NIGTC, WM.B.EERDMANS, 1981.

F.J.Matera, *Galatians*, Sacra Pagina, MG/The Liturgical Pr., 1992.

J.L.Martin, *Galatians*, The Anchor Bible, Doubleday, 1997.

B.J.Malina, J.J.Pilch, *Social-Science Commentary on the Letters of Paul*, Fortress  
Pr., 2006.

H.Schlier, *Der Brief an die Galater*, Meyers KEK, Vandenhoeck & Ruprecht, 1971.

F.Mussner, *Der Galaterbrief*, HThKNT, Herder, 1981.

J.Rohde, *Der Brief des Paulus an die Galater*, ThHkz(NT), Evangelische  
Verlagsanstalt, 1989.

U.Borse, *Der Standort des Galater Briefes*, Bonner Biblische Beiträge 41, Perter  
Hansen Vlg, 1972.

J.D.Crossan and Jonathan L.Reed, *In Search of Paul*, HarperSanFrancisco, 2004.

以上、欧語文献は、注において、原則として著者名と当該頁の参照指示がなされる。

<小見出しについて>

写本レベルではもちろん、章番号も節番号もないのですが、従来、便宜上、章番号、



節番号が付されてきた。また、内容上の区分も様々になされてきた。この「私訳」には、読み易さを考慮して簡単な小見出しを付けてある。ただし、次に掲げる目次のうち、本文に挿入されるのは、Ⅱ（２）およびⅢ以外は＜ ＞で囲んだ項目のみである。

## 目次

### Ⅰ 導入 1：1～10

＜挨拶＞ 1：1～5

＜別の福音はない—驚きと呪い＞ 1：6～10

### Ⅱ 本論 1：11～6：10

#### （１）パウロの使徒職に関する回顧

＜啓示に基づくパウロの福音と召命の回顧＞ 1：11～17

＜最初のエルサレム訪問＞ 1：18～24

＜二度目のエルサレム訪問＝エルサレム会議＞ 2：1～10

＜アンティオキアの衝突＞ 2：11～14

#### （２）「信仰による義」の提示 2：15～21

#### （３）律法によるか、信仰によるか

＜霊の受領の根拠＞ 3：1～5

＜アブラハムの子どもである信仰に依る人々＞ 3：6～9

＜キリストによる律法の呪いからの解放＞ 3：10～14

＜約束と律法＞ 3：15～22

＜養育係からの解放と信仰の到来＞ 3：23～4：7

＜ガラテヤの人々に対するパウロの懸念＞ 4：8～20

＜ハガルとサラの比喻＞ 4：21～31

#### （４）自由と愛と霊—勧告—

＜キリストのうちにある自由＞ 5：1～12

＜霊の実と肉の業＞ 5：13～26

＜互いに重荷を担い合いなさい—善を行ないなさい＞ 6：1～10

### Ⅲ 結び—警告と祝福— 6：11～18

## ガラテヤの信徒のみなさんへ

### 1

#### <挨拶>

1 人々からでもなく、一人の人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死者たちの中から立ち上がらせた神によって遣わされた者<sup>3</sup>パウロ、2 そしてわたしと一緒にいるすべての兄弟たち<sup>4</sup>が、ガラテヤの諸教会に宛てて（送ります）。3 みなさんに恵みと平和が、わたしたちの父である神から、また主イエス・キリストから（ありますように）<sup>5</sup>。4 彼は、わたしたちの罪のためにご自身を与えられましたが、それは、神の、つまりわたしたちの父の意志に従って、今の悪の世から<sup>6</sup>わたしたちを救い出すためでした。5 そのような神に<sup>7</sup>栄光が世々限りなく（ありますように）<sup>8</sup>、アーメン。

#### <別の福音はない—驚きと呪い>

6 わたしは驚いています。というのは<sup>9</sup>、こんなにも早くあなたがたが、[キリストという] 恵みによってあなたがたを召し出してくださった方から離れて、違う福音に移ろうとしているからです。7 （しかし、）それは、別の（福音など）ではなく、ただ、ある者たちがいて、あなたがたを動揺させ、キリストの福音を正反対のものに変えようとしている<sup>10</sup>だけなのです。8 しかし、仮にわたしたちであっても、あるいは

---

2 **PROS GALATAS**. 直訳では「ガラテヤの人々へ」あるいは「ガラテヤのみなさんへ」。名宛人が信徒集団すなわち教会であることは確実なので、むしろ「ガラテヤ教会のみなさんへ」あるいは「ガラテヤの信徒のみなさんへ」が内容に即している。協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳は「ガラテヤ人への手紙」。新共同訳は「ガラテヤの信徒への手紙」。

3 「遣わされた者」は *apostolos*。通常は「使徒」と訳されるが、前置詞句との繋がりから、むしろ原意「派遣された者、遣わされた者」がここでは適切。

4 この手紙の共同発信人である「わたしと一緒にいるすべての兄弟たち」は、おそらくパウロの同労者を指す。山内真、48～49 頁、U.Borse, 43f.

5 ローマ 1 : 7、参照。

6 「今の悪の世から」は、*ek tou aiōnos tou enestōtos ponērou*。「今の世、現世、現在の世」*ho aiōn ho enestōs* は、黙示文学的用語。*enestōs* 「今の、現在の」は、*mellōn* 「来るべき」と対比して用いられる。ローマ 8 : 38、1 コリント 3 : 22、参照。

7 「そのような神に」は関係代名詞（与格形）*hōi*。ニュアンスとしては、「今の悪の世からわたしたちを救い出すという意志を持っておられる神に」。

8 ローマ 16 : 27、参照。

9 「というのは」と訳したのは、接続詞 *hoti*。ここでは、*hoti* 以下を *that clause*（ほかの日本語訳の解釈）というより、原因を表す副文章と解した。可能な限り、ギリシア語原文の記述の流れを重視したいためでもある。

10 「正反対のものに変えようとしている」は、*thelontes metastrepsai*。 *metastrepsai* (1 aor. 不定

天からの使いであっても、わたしたちがあなたがたに福音として伝えたことに反して  
[あなたがたに] 福音を伝える<sup>11</sup>なら、呪われよ<sup>12</sup>。9 以前わたしたちが言っておいた  
ように、今もう一度わたしは言います。もし、誰かが、あなたがたが受け入れた<sup>13</sup>こ  
とに反して、あなたがたに福音を伝えるなら、呪われよ。

10 というのも、今、わたしは人々や、あるいは神を説得しようとしている<sup>14</sup>でしょ  
うか。あるいはまた、わたしは人々に喜ばれることを熱心に追い求めているでしょ  
うか。もし、今なお、わたしが人々に喜ばれようとしているのであれば、わたしはキリス  
トの僕ではありません。

#### <啓示に基づくパウロの福音と召命の回顧>

11 実際、兄弟のみなさん、わたしはあなたがたにはつきり知ってほしい<sup>15</sup>ですが、  
わたしによって伝えられた福音は、人間的なもの<sup>16</sup>ではありません。12 というのは、  
わたしは、それをある人から受け取ったのでも、教えられたのでもなく、むしろ、イ

---

詞) <metastrephō<meta (反対・裏返し) +strephō (変える)。「反対のものに変えようと欲し  
ている (ある人々がいるだけ)」(山内訳)。「逆のものとするを欲している (ある人々がいるだ  
け)」(佐竹訳)「覆そうとしている (にすぎない)」(新共同訳)、「すり替えてしまおうと望んでい  
る」(原口訳)、“want to pervert”(Betz, Matera), “verkehren wollen”(Rohde)

11 「福音として伝えた」euāngelismetha も「伝えた」euangelizētai も、同じ動詞 euangelizō の変  
化形。訳出に当たって、能動相では、目的語が「福音」の場合は「伝える」、その他の場合は「福  
音として伝える」、目的語がない場合 (自動詞) は「福音を伝える」と原則的に訳し分けた。

12 「呪われよ」は、anathema estō。「神に呪われるがよい」、「神に見捨てられるがよい」のニュア  
ンス。「呪われよ!」(原口訳)、「そのものは呪われよ」(佐竹訳、山内訳)、「呪われるがよい」(新  
共同訳)、「呪いあれ」(青野訳)、「その者にのろいがあるように」(フランシスコ会聖書研究所訳)、  
「その人は呪われるべきである」(協会訳)、「その者は呪われるべきです」(新改訳)。

13 「あなたがたが受け入れた」は、parelabete。「受ける、受け入れる」paralambanō は、ユダヤ教  
において伝承の伝達に関わる術語として用いられた。また、ヘレニズムの密儀宗教においても密議  
の伝授を表す術語としての用例があると言われる。

14 「説得しようとしている」は、peithō。山内訳、原口訳が同じ。「味方にしようとしている」(佐竹  
訳)、「取り入ろうとしている」(新共同訳、新改訳、フランシスコ会聖書研究所訳)、mm “am I now  
persuading men or God?”(Betz)、「説得する」については、Betz, pp.54f、山内、69~72 頁、参  
照。人々を説得するのは、詐欺、嘘吐き、魔術、神を説得するのは、詭弁、偽の宗教、人々を喜ば  
せるのは、律法遵守を説く宣教の類。パウロは三者とも自分の行動とは相容れないとして批判する。

15 「はつきり知ってほしい」は、gnōrizō。「宣言する」(バレルバロ訳)、「指摘しておきたい」(佐竹訳)、  
「知らせましょう」(新改訳)、「知らせておく」(山内訳、原口訳)、「はつきり言うておく」(協会  
訳)、「はつきり言います」(新共同訳)、「はつきり言うておきます」(フランシスコ会聖書研究所訳)、  
「告げる」(青野訳)、“I would have you know”(Betz), “I want you to know”(Martin, Matera)、等。

16 「人間的なもの」と訳したのは、kata anthrōpon。パウロによって告げ知らされた福音の起源と  
性格を表したもの。「人間的なもの」(佐竹訳、山内訳)、佐竹、70 頁、山内、75 頁、参照。「人間  
的なものに従っている」(原口訳)、“human in nature”(Betz), “a human affair”(Matera), “von  
menschlicher Art”(Rohde), “nach Menschenart”(Mussner), “ein menschliches  
Evangelium”(Schlier),

エス・キリストの啓示をとおして受け取ったからです<sup>17</sup>。13 というのも、あなたがたは、ユダヤ人の宗教に徹していたわたしの以前の生き方を<sup>18</sup>既に聞いています。すなわち、わたしは神の教会を際限なく<sup>19</sup>迫害し、それを撲滅しようとしていました。14 そして、ユダヤ人の宗教においては、わたしの同族の中の多くの同世代の者たちよりずっと先に進んでいました<sup>20</sup>し、わたしの父祖たち以来の伝承<sup>21</sup>にとりわけ熱心な者でした。

15 しかし、わたしの母の胎内（にいるとき）からわたしを選び分け、その恵みをとおして召し出した方〔である神〕が、自らよしと決めて<sup>22</sup>、16 わたしを使って異邦人たちのあいだにその御子を福音として伝えさせるために<sup>23</sup>、わたしの中に御子を啓示したとき、直ちに<sup>24</sup>、わたしは血肉<sup>25</sup>とは相談せず、17 また、エルサレムへ、つまり、

- 
- <sup>17</sup> 12 節は、oude (gar) egō (para anthrōpou) parelabon auto oute edidachthēn, alla (di' apokalypseōs Iēsou Christou) で、後半部 alla 以下には動詞が省略されている。前半部から、parelabon あるいは parelabon kai edidachthēn を補って読むのがごく普通の読みだろう。佐竹、71 頁、フランシスコ会聖書研究所訳、参照。
- <sup>18</sup> 「ユダヤ人の宗教に徹していたわたしの以前の生き方を」は、tēn emēn anastrophēn pote en tō Ioudaismō. 「徹していた」は意識。Ioudaismos は、前 2 世紀にユダヤの急速なヘレニズム化の波に対抗して成立した概念で、新約聖書における用例は本節と次節のみ。2 マカバイ、2:21、8:1、14:38、参照。新共同訳では、それらはそれぞれ、「ユダヤ人の宗教」、「ユダヤ人としての生き方」、「ユダヤ教」と訳されている。「ユダヤ主義」の訳語も可能。
- <sup>19</sup> 「際限なく」は、kath'hyperbolēn. 直訳的には「限度を越えて、度外れて、過度に、極度に、極端に」。「徹底的に」（フランシスコ会聖書研究所訳、新共同訳）、「極度に」（佐竹訳）、「激しく」（協会訳、新改訳、山内訳）、「ひどく」（原口訳）等。
- <sup>20</sup> 「先に進んでいました」は、proekoptōn（未完了過去）<prokoptō「前進する、進歩する」。ストア派などヘレニズム通俗哲学において、教育課程に関して好んで用いられる用語。ヘレニズム・ユダヤ教を経て初期キリスト教の用語となった。Cf. Betz, p.68, Bruce, p.91. さらに、使徒言行録 22:3、参照。「すすんでいた」（バレルバロ訳）、「進歩し続け」（佐竹訳）など。
- <sup>21</sup> 「わたしの父祖たち以来の伝承」は、tōn patrikōn mou paradoseōn. 「先祖からの伝承」（新共同訳、新改訳）、「父祖たちの伝承」（青野訳）、「わたしの父祖の伝承」（佐竹訳、山内訳）、「先祖たちの言い伝え」（協会訳）、「先祖からの伝統」（フランシスコ会聖書研究所訳）等。「父祖たち以来の伝承」とは、律法解釈が代々蓄積されてきた口頭伝承。これに律法それ自体と並ぶ権威を認めたファリサイ派に対し、サドカイ派は認めなかった。本節の発言からもパウロがファリサイ派に「連なる者であったことが分かる」。
- <sup>22</sup> 「自らよしと決めて」と訳したのは、15 節冒頭にある hote de eudokēsen の eudokēsen. これは、原文で 16 節冒頭に来る apokalypsai (1 aor. 不定詞) <apokalyptō（啓示する）に続く。
- <sup>23</sup> ここは、目的を表す hina 構文。hina euangelizōmai auton en tois ethnesin. 直訳「わたしが彼を異邦人たちのなかに福音として伝えるために」の主語が、主文の主語「神」と異なるために、日本語では続き具合がしっくりしない。そこで、このように、副文の中の主語を主文の主語に合わせて意識するのがよい。内容的には、2:7 も参照。
- <sup>24</sup> 「直ちに」は、17 節後半の「アラビアまで出かけて行き」以降にかかる。
- <sup>25</sup> 「血肉」は直訳すると「肉と血」。神と対置ないしは区別されるべきものとしての人間を表わす後期ユダヤ教の表現。シラ書（ベン・シラの知恵）14:18、17:31 等、参照。佐竹、100～101 頁、参照。つまり、「わたしはいかなる人とも相談せず」という意味。

わたしより先に使徒となった人々の許へ<sup>26</sup>上ることもせず、アラビア<sup>27</sup>まで出かけて行き、そして再びダマスコスに戻りました。

#### ＜最初のエルサレム訪問＞

18 それから三年後、わたしはケファと面識を得るために<sup>28</sup>エルサレムに上り、彼の許に十五日間滞在しましたが、19 しかし、主の兄弟ヤコブ以外には他の使徒たちの誰とも会いませんでした。20 わたしがあなたがたに書いていることは、見よ、神の前で、嘘偽りは言っていない<sup>29</sup>。

21 それから、わたしはシリア地方とキリキア地方に行きました<sup>30</sup>。22 しかし、キリストにある<sup>31</sup>ユダヤの諸教会には顔を知られていなかったのです。23 しかし、ただ彼らは、「かつてわれわれを迫害していた者が、かつては撲滅しようとしていた<sup>32</sup>信仰を今や福音として伝えている」と聞いて、24 わたしのことで神を賛美していました。

---

<sup>26</sup> 「わたしより先に使徒となった人たちの許へ」は、pros tous pro emou apostolous. hoi pro emou apostoloi は、直訳的には「わたしよりも前からの使徒たち」。

<sup>27</sup> アラビアは、地理的には「メソポタミアの西側、オロンテス溪谷およびヨルダン溪谷の東側に位置するシリア砂漠を指し、南はペルシア湾、インド洋、紅海に囲まれた半島に連なっている」広範な地域一帯を意味する。しかし、ここでは、より狭い地域、ダマスコス南東の、ナバテア王国の北部一帯であろう。王国の本拠地はペトラ（現在はヨルダン領）であり、ダマスコスにはナバテアの王アレタス四世の代官が駐在していた。ちなみに、ヘブライ語でも、アラビー（複数はアレビーム）は、しばしば砂漠の遊牧民の一般的な名称として使われている。ローマのトラヤヌス帝によってナバテア王国が滅ぼされた（後 105/106）後、この地域はアラビア州と呼ばれるようになった。U.Borse による“Arabia”の項目『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 I』教文館、1993 年、186 頁、佐竹、102～103 頁、Martin, 170, Matera, 61、参照。2 コリント 11 : 32～33、参照。

<sup>28</sup> 「面識を得るために」と訳したのは、historēsai (1 aor. 不定詞) <historeō「訪問する、訪ねる、知り合いになる」。

<sup>29</sup> 「神の前で」は、enōpion tou theou. われわれの「神懸けて、神に懸けて」と類似表現。佐竹、110 頁、山内、94 頁、および 444 頁、注 187、参照。ローマ 1 : 9、2 コリント 1 : 23、1 テサロニケ 2 : 5、10、フィリピ 1 : 8、参照。「嘘偽りは言っていない」は、ou pseudomai. ローマ 9 : 1、2 コリント 11 : 31、参照。

<sup>30</sup> シリア地方もキリキア地方も、ローマ帝国の行政上の区分「属州」とは異なる。シリアはアンティオキア（現在のトルコのアンタキア）を中心とする地域、キリキアはシリアに隣接する小アジア南東部、パウロの生まれ故郷タルソスを中心とする地域。当時、エルサレムのあるパレスティナは、行政上はシリア州であったが、パウロは、エルサレムを中心とする地域をユダヤと呼んでいる。

<sup>31</sup> 「キリストにある」は en Christō. 協会訳、新改訳、佐竹訳、青野訳、山内訳がこう訳している。「キリストに結ばれている」（新共同訳）、「キリストと結ばれた」（フランシスコ会聖書研究所訳）、「キリストと一体のものとなった」（本田訳）、mm “which are in Christ”(Betz, Matera), “(the churches) of Christ (in Judea)”(RSV, JB), “Christ’s (congregations in Judea)”(NEB)、パウロは、「諸教会」に「キリストにある」を付加することによって、(ユダヤ教の) シナゴグとの混同を避けた。「イエスをメシア（キリスト）として受け入れている」のニュアンスがある。「ユダヤの諸教会」との結合については、佐竹、111 頁、参照。

<sup>32</sup> 使徒言行録 8 : 3、参照。

＜二度目のエルサレム訪問＝エルサレム会議＞

1 それから十四年経って、わたしはバルナバ<sup>33</sup>と一緒に再びエルサレムに上りましたが、そのときティトスも連れて行きました<sup>34</sup>。2 しかし、上ったのは、啓示に従ったのです。そして、わたしは、異邦人のあいだでわたしが宣べ伝えている福音のことで彼らに伺いを立てた<sup>35</sup>のです。有力者たちに<sup>36</sup>は個人的にですが、わたしは今無駄に走っているのではないか、あるいは、(これまで無駄に) 走ったのではないか、と(伺いを立てたのです)。3 しかし、わたしと一緒にいたギリシア人のティトスでさえ、強要されながらも割礼を受けませんでした<sup>37</sup>。4 密かに忍び込んできた<sup>38</sup>偽兄弟たちのため(に強要されたの)です<sup>39</sup>。彼らは、わたしたちがキリスト・イエスにあって持っているわたしたちの自由を偵察するために<sup>40</sup>潜入してきたのですが、それは、わたしたちを奴隷にするためでした<sup>41</sup>。5 また、彼らに、わたしたちは、一瞬たりとも屈服して譲歩することはありませんでしたが、それは、福音の真理<sup>42</sup>があなたがたの許に留

<sup>33</sup> 使徒言行録 4 : 36、11 : 19～30、参照。

<sup>34</sup> 「連れて行きました」は、symparalabōn < symparalambanō 「一緒に連れて行く」。「一緒に」を省いたのは、すぐ前に meta Barnabā 「バルナバと一緒に」があつて、冗長になるため。意味にはほとんど影響がない。

<sup>35</sup> 「伺いを立てた」は、anethemēn 2 aor. 中動相、1 人称、単数 < anatithēmi 「載せる、立てる、奉納する」から「(相手の判断を求めて) 話す」の意味で用いられる。そこで、むしろ「伺いを立てる」が適訳だと思われる。

<sup>36</sup> 「有力者たちに」は、tois dokousin. “with the acknowledged leaders” (NRSV), “with those of repute” (REB), “with the men of repute” (NEB), “with the leaders” (NEB), “before the ‘men of eminence’” (Betz), “to those who were influential” (Matera), 「かの有力な人たちに」(佐竹訳、山内訳)、『重だったひとたち』に(協会訳)「おもだった人たちに」(新改訳、新共同訳)、「重立った人たちに」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「主だった人たちと」(本田訳)等。

<sup>37</sup> 「ティトスでさえ、強要されながらも割礼を受けませんでした」は、oude Titos ... ēnankasthē peritmēthēnai. ここが、強要されたけれども割礼を受けるには至らなかった、という意味になる点については、佐竹、127～128 頁、山内、108 頁および 455～456 頁(注 58)、参照。4 : 11、フィリピ 2 : 16、参照。

<sup>38</sup> 「密かに忍び込んできた」は、pareisaktos 形容詞的分詞 < pareisagō 「密かに持ち込む」。所謂 hapax legomenon. 意味は、少し後に出る pareisēlthon (2 aor. 3 人称、単数 < pareiserchomai) とほぼ同じ。

<sup>39</sup> この 4 節冒頭部 dia de tous pareisaktous pseudadelphous は、内容的には 3 節に関係している。節番号が便宜上後から付けられたことを考えれば、むしろ「密かに忍び込んできた偽兄弟たちのために強要されながらも割礼を受けませんでした」とした方が繋がりをはっきりする箇所。前置詞 dia は、ここでは根拠・理由・原因を表す。

<sup>40</sup> 「偵察するために」は、kataskopēsai 1 aor. 不定詞 < kataskopeō 「偵察する、探りを入れる」。山内訳が同じ。「探索し」(佐竹訳)、「ねらって」(協会訳)、「探るために」(バルバロ訳)、「付けねらい」(新共同訳)、“in order to spy out” (Betz, Martin), “to spy on” (NRSV, Matera)、等。

<sup>41</sup> 5 : 1、参照。

<sup>42</sup> 14 節、さらに 4 : 16、参照。

まり続けるためでした。 6 しかし、ひとかどの者と思われている人々からは<sup>43</sup>、  
 一彼らがそもそもどんな人たちだったとしても、わたしにとってそれはどうでもよい  
 ことです、神は人の顔色を窺ったりしません<sup>44</sup>。一わたしに対しては<sup>45</sup>、実際、有力者  
 たちはこれ以上他に何も持ちかけてこなかった<sup>46</sup>のです。 7 むしろ反対に、彼らは、  
 ペトロが割礼（ある者）の福音を委ねられたように、わたしが無割礼（の者）の福音  
 を委ねられたということを認めて<sup>47</sup>、 8 というのは、割礼（ある者）の使徒職のため  
 にペトロに対して働いた方が、異邦人のためにわたしに対しても働いたからですが<sup>48</sup>、  
 9 また、わたしに与えられた恵み<sup>49</sup>を知って、ヤコブとケファとヨハネ、つまり柱と

<sup>43</sup> 「ひとかどの者と思われている人々からは」は、Apo de tōn dokountōn einai ti。パウロは、2 節で既に言及した「有力者たち」hoi dokountes (<tois dokousin)を、ここで「何者かである→ひとかどの者である、偉い人である」einai ti という不定詞句のついた、熟語としては元来の言い回しと思われる言葉で言い換えることによって、「有力者」という評価も所詮人間的なものに過ぎないことを想起させようとしているように思われる。9 節には、「柱と思われている人々」が出る。使徒言行録 5 : 36 も参照。また、本節は、口述筆記らしさが表れている箇所、で、「ひとかどの者と思われている人々からは」と切り出したパウロの念頭に最初あったのは、おそらく「これ以上何も持ちかけられはしませんでした」という結びの言葉だっただろう。しかし、「彼らがそもそも……依怙最良しません」を挿入した後、彼の口から出たのは、「わたしに対しては、実際」emoi gar で始まる、有力者たちを主語とする文章だった、というわけである。このような文法上の齟齬は「話す」場面では起こり得ることである。

<sup>44</sup> 「人の顔色を窺ったりしません」は、prosōpon ...anthrōpou ou lambanei。直訳は「人の顔を取らない」。「ある人を依怙最良しない、偏り見ない、媚びない」等。Betz, p.95, 山内、116 頁および 465 頁（注 126～128）、参照。「人を分け隔てなさいません」（新共同訳、新改訳）、「人を偏重したりはしない」（佐竹訳）、「人の顔を偏り見ることはされない」（青野訳）、「人のうわべをお取りになりません」（蓮見訳）、「人を偏り見られない」（原口訳）等。LXX 訳申命記 10 : 17 に、ou thaumazei prosōpon、同シラ書 35 : 13 に、ou lēmpsetai prosōpon という用例がある。ローマ 2 : 11、参照。

<sup>45</sup> 「というのも、わたしに対しては」は、emoi gar。emoi が文頭に出され、強調されている。反対者たちの主張に対する論争的発言。佐竹、147 頁、参照。

<sup>46</sup> 「これ以上他に何も持ちかけてこなかった」は、ouden prosanethento。prosanethento < prosanatithēmi 「更に課す／提示する、加える」等。新約では、中動相の用例のみ。ここは、2 aor. 3 人称、複数、他動詞として使われている。1 : 16 では、「相談する」の意味で使われていた。パウロが彼ら有力者たちに（個別に）伺いを立てた（<anatithēmi）彼自身の福音（2 節）に、彼らは何も付け加えて課すこともなかったし、また、少し後に示されるエルサレムの貧しい人々（つまりエルサレム教会）への配慮の要請（10 節）を、ここで先取りして、それ以外には彼らは何も課さなかった、というニュアンスがこの単語には込められているだろう。“prosanatithēmai”の項目『ギリシア語新約聖書釈義辞典 III』（教文館、1995 年、197 頁）、参照。

<sup>47</sup> 「……ということを認めて」は、idontes hoti。9 節の「また……恵みを知って」kai gnontes tēn charin と並列。idontes も gnontes も分詞、男性、複数、主格。

<sup>48</sup> 可能な限り原文に即して訳した。通常は、「ペトロに対して働いて彼を割礼（ある者のための）使徒職に（就けた）方が、わたしにも働いて異邦人（のための使徒職）に（就けた）からです」のようになんかの文言を省略されたものとして補わないと日本語文にならない。佐竹、山内等の注解や新共同訳等の日本語訳は基本的にこの方針をとっている。協会訳が「ペテロに働きかけて割礼の者への使徒の務めにつかせたかたは、わたしにも働きかけて、異邦人につかわして下さったからである」としている。

<sup>49</sup> ローマ 15 : 15、参照。

思われている人々<sup>50</sup>は、わたしとバルナバに対して、交わりの右手を<sup>51</sup>差し出しました。これは、わたしたちが異邦人を対象にし、彼らが割礼（ある者）を対象にする（という意思表示です）<sup>52</sup>。10 ただ、貧しい人々をわたしたちが覚えているように<sup>53</sup>、とのことでしたが、他ならぬこのことを、わたしは努めて熱心に行なったのです<sup>54</sup>。

### <アンティオキアの衝突>

11 しかし、ケファがアイティオキアにやって来たとき、面と向かってわたしは彼に反対しました<sup>55</sup>。彼が非難されるべき<sup>56</sup>だったからです。12 というのは、ある人々がヤコブの許からやって来る前は、彼も異邦人たちと一緒に食事していたのに、彼らが

<sup>50</sup> 「柱と見なされている人々」は、*hoi dokountes styloi einai*。先に「有力者たち」と訳したのと同じ分詞形 *dokountes* が「柱である」*styloi einai* という不定詞句と結びついた形で現れる。「柱」というイメージの背後には、宇宙全体を神が建てた家と見る古代世界に広く流布していた神話的表象、また、教会を神殿とする伝統的な理解がある。佐竹、163～164 頁、参照。

<sup>51</sup> 「交わりの右手」は、*dexiās ..... koinōniās*。エルサレム教会内部で有力者と見なされている人々の方から、右手を差し出して握手を求めてきたというこの記述は、宣教活動におけるペトロを中心とするユダヤ人宣教とパウロを中心とする異邦人宣教という役割分担を、エルサレム教会側が正式に承認したのだというパウロの主張がある。その関連でティトスの一件を持ち出すことによって、彼は、異邦人には割礼も不要という点も含めての、交わりの右手だったはずではないか、と問いかけている。

<sup>52</sup> 「これは、わたしたちが異邦人を対象にし、彼らが割礼（ある者）を対象にする（という意思表示です）」は、*hina hēmeis eis ta ethnē autoi de eis tēn peritomēn*。

<sup>53</sup> 10 節は、交わりの右手によって示されたユダヤ人宣教と異邦人宣教をそれぞれ独立して担う両陣営の協力関係に対する留保条件である。「貧しい人々を覚えている」は、異邦人の諸教会による具体的な献金活動による支援を意味する。献金については、1 コリント 16 : 1、2 コリント 8～9、ローマ 15 : 26、参照。「貧しい人々」は、エルサレム教会の信徒の呼称という側面もあるが、ローマ 15 : 26 における記述から、より具体的に、エルサレム教会の中に実際に存在した貧しい人々をここでは指す、とするのが妥当であろう。山内、129～130 頁、佐竹、170～174 頁、参照。なお、約束の地に住むユダヤ人に対するディアスポラ世界のユダヤ人諸共同体による援助は、神殿税として、ユダヤの慣習であった。「目で見て分かるのがユダヤ人であるわけでもなく、また目で見て分かる肉に刻まれたものが割礼であるわけでもないからです。むしろ、隠されたところでそうであるものこそユダヤ人であり、文字ではなく霊における心の割礼こそ割礼なのです」（ローマ 2 : 28～29）、「アブラハムこそわたしたちすべての者の父です」（同 4 : 16）と語るパウロは、いわばディアスポラ世界の異邦人諸教会がエルサレム教会の貧しい人々を、交わりの具体的なしとしての献金によって支えることは、十分理解できることであった。

<sup>54</sup> 「わたしたち」がここで「わたし」になっているのは、エルサレム会議と呼ばれるこの会談と手紙執筆時の間に、宣教活動におけるバルナバからの独立という事態が生じたためであり、パウロは、それ以降の活動において、まさに異邦人諸教会による献金に熱心に取り組んだ、と主張している。それによって、少なくとも自分は、互いに右手で握手しつつ確認したことを、留保条件を含めて遵守してきたのに、あなたがた破ったではないか、との批判を匂わせている。エルサレム教会の貧しい人々への援助については、特に 2 コリント 8、9 章、参照。その他、使徒言行録 11 : 29、参照。

<sup>55</sup> 「面と向かって彼に反対しました」は、*kata prosōpon autōi antestēn*。antestēn 2 aor. 1 人称、単数 <anthistēmi>「対抗する、反抗する、反対する、敵対する」。

<sup>56</sup> 「非難されるべき」は、*kategnōsmenos* 現在完了、受動分詞、男性、単数、主格 <kataginōskō>「有罪判決を下す、有罪にする、責める、非難する」。



やって来ると、今度は<sup>57</sup>、割礼に依る人々<sup>58</sup>を恐れて、(一緒に食事の席から)身を引  
き(異邦人たちと)一線を画そうとした<sup>59</sup>からです。13そして、残りのユダヤ人たち  
も一緒に欺瞞的行動をし<sup>60</sup>、その結果、バルナバさえも彼らの欺瞞的行動によって一  
緒に連れ去られてしまった<sup>61</sup>のです。14しかし、わたしは、彼らが福音の真理に向か  
って真っ直ぐに歩いていない<sup>62</sup>のを見たとき、ケファに対して、全員の前でこう言い  
ました。「あなたは、ユダヤ人でありながら、異邦人の習慣に従って、つまりユダヤ人  
の習慣に従わずに生活しているのに、どうして、異邦人にユダヤ人として生活するこ  
と<sup>63</sup>を強要するのですか」と。

57 「彼らがやって来ると、今度は」は、*hote de elthon*。De が前半と後半とを対比する機能を果たし  
ているので、「今度は」と訳した。

58 「割礼に依る人々」は、*tous ek peritomēs*。単に「割礼の者ども」(協会訳)、「割礼を受けている  
者たち」(新共同訳)、「割礼の人たち」(佐竹訳)、「割礼の人々」(山内訳)、「割礼の者達」(原口訳)  
と訳すのではなく、前置詞 *ek* のニュアンスを訳語に表すべきだと思われる。ここでは、ユダヤ人  
キリスト者のうちでも割礼を救いの条件の一つとする集団の一員を指すと解した。新改訳が「割礼  
派の人々」。

59 「一線を画そうとした」と訳したのは、*aphorizen*。LS では、最初に “mark off by boundaries”  
という基本的な意味が示されている。“separated himself”(Betz)、参照。「離れて行った」(協会訳、  
新改訳、佐竹訳、山内訳)、「離れていった」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「身を引いた」(原口  
訳)、等。

60 「一緒に欺瞞的行動をし」は、*synypekrithēsan* < *synypokrinomai* < *syn* 「一緒に」 + *hypokrinomai*  
「役を演じる、偽装する、欺瞞的行為・行動をする」(元来は役者の演技を指したが、自分自身は  
表で出さず、別人格の役柄に成りすまして演技することから、日常生活場面での「偽装、欺瞞的行  
為・行動、偽善」を表すようになった。「偽善の振る舞いをし」(原口訳)、「偽行を共にし」(佐竹  
訳)、「一緒に偽行をし」(山内訳)、「心にもないことを行い」(新共同訳)、等。

61 「一緒に連れ去られてしまった」は、*synapēchthē* < *synapagō* < *syn* 「一緒に」 + *apagō* 「連れ去  
る、連行する、引いて行く、導く、通じる」。ここは、「彼らの欺瞞的行動に引きずり込まれた」と  
いう具体的現象よりも、むしろ、彼らの欺瞞的行動によって、バルナバが異邦人と一緒に食事の席  
から引き離されて、欺瞞的行動をしている人々の陣営に連れ去られた、というニュアンスと採るべ  
きであろう。マタイ 7: 13~14 に出る *apagō* の用例(意味は「導く、通じる」)、参照。それを参  
考にすれば、「彼らの欺瞞的行動に引きずり込まれた」は、*synapēchthē autōn tēi hypokrisei* (本  
文)ではなく、むしろ、*synapēchthē eis tēn hypokrisin autōn* と表現されるだろう。なお、「連れ  
去られた」と訳している日本語訳は、佐竹訳、山内訳。「偽善の道連れにされた」(原口訳)も。

62 「彼らが福音の真理に向かって真っ直ぐ歩いていない」は、*ouk orthopodousin pros tēn alētheian tou euangeliou*。pros 以下は通常、「福音の真理にのっとして」(新共同訳)、「福音の真理にふさわ  
しく」(佐竹訳、山内訳)、「福音の真理に従って」(協会訳)、「福音の真理に対して」(原口訳)の  
ように訳される。しかし、*orthopodeō* 「真っ直ぐに歩く」との結びつきと *pros* + 対格の意味から、  
一番素直な訳、あるいは朗読されるこの手紙を聴いている異邦人信徒たちが受け取る意味は、「…  
…に向かって真っ直ぐに歩く」であろうと思われる。

63 「ユダヤ人として生活すること」と訳したのは、*ioudaizein* という不定詞。異邦人が、律法を受け  
入れ、割礼や食事規定など種々の決まりを守って生活すること。パウロにとって、これは、せつ々  
く結ばれた交わりの右の手による握手の意味に逆行することであり、異邦人が伝統的なユダヤ教の  
改宗者となることと異ならなかった。「ユダヤ風の生活をする事」(原口訳)、「ユダヤ化すること」  
(佐竹訳)、「ユダヤ人のように生活すること」(新共同訳、山内訳)、等。

＜「信仰による義」の提示＞

15 わたしたちは、生まれながらのユダヤ人であって、異邦人出身の罪人ではありません。16 [しかし] わたしたちは、人が義とされるのは律法の業によるのではなく、イエス・キリストの信仰をとおして<sup>64</sup>以外にはあり得ないと知ったので、わたしたちもまたキリスト・イエスを信じたのです。それは、キリストの信仰によってわたしたちが義とされるためであって、律法の業によってではない<sup>65</sup>のです。なぜなら、律法の業によっては、人は誰ひとり義とされないだろう<sup>66</sup>からです。17 しかし、もし、わたしたちがキリストにあって義とされることを探し求めながら、わたしたち自身も罪人であることが明らかになった<sup>67</sup>ならば、キリストは罪に仕える者なのでしょうか。断じて、否です。18 というのは、もし、わたしが解体したものを再びわたしが建てるならば<sup>68</sup>、自分自身が違反者であると証明することになるからです。19 というのも、わ

<sup>64</sup> 「イエス・キリストの信仰をとおして」は、*dia pisteōs Iēsou Christou*。ここに表れる *pistis Iēsou Christou* は、従来、一般的に、「イエス・キリストへの信仰」（新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳、原口訳）、「キリスト・イエスを信じる信仰」（協会訳、新改訳）、等と訳されてきた。佐竹訳は「キリスト・イエスの信仰」であるが、「単にキリスト・イエスを信じることを指すだけではなく、キリスト・イエスによって可能とされる信仰をも指している」とした上で、『キリストの（持つ）真実』と理解することは正しくない」と指摘する。原文の「イエス・キリストの」という属格を、主格的属格ととるか、目的格的属格ととるかで、研究者の見解は分かれる。わたしは、前者を支持するが、この問題については、太田修司「*Pistis Iēsou Christou*—言語使用の観察に基づく論考」『聖書学論集 26』日本聖書学研究所、1993年、132～163頁、同「ガラテヤ書における『イエスの信実』」『日本の聖書学 1』ATD・NTD 聖書注解書刊行会、1995年、123～146頁、原口尚彰『パウロの宣教』（聖書の研究シリーズ 50）教文館、1995年、清水哲郎『パウロの言語哲学』（双書 現代の哲学）岩波書店、2001年、参照。わたしは、基本的に、清水の「イエス自身が取った態度」としての「信」の理解を支持している。本節の「キリストの信仰（によって）」や3:22の「イエス・キリストの信仰（に基ついて）」も含めて、この概念は、ローマ3:23～26でパウロ自身によって敷衍されている、同3:22に出る「イエス・キリストの信仰」から理解されるべきであろう。おそらく、パウロは、十字架上で示されたイエス自身の信仰を律法の業と対置して考えているのであろう。蓮見は、16節の「イエス・キリストの信仰」をおそらく「キリスト・イエスを信じた」に合わせて（<sup>p</sup><sup>46</sup>やA、D<sup>2</sup>などの写本の読みに従ったというよりも）、「キリスト・イエスの信仰」と訳すが、注解部分では、「イエス・キリストの〔わたしたちに対する〕真実」という理解を示す。これは、太田の理解に沿ったものである。しかし、そうであれば、本文の訳でも「真実」とすべきであろう。バルバロ訳も、残念ながら目的格的属格ととして訳している。

<sup>65</sup> 3:2、8、24、ローマ3:28；4:5、5:1、フィリピ3:9、参照。

<sup>66</sup> 「人は誰ひとり義とされないだろう」は、*ou dikaiōthēsetai pāsa sarx* 「すべての肉は義とされない」。背景に、ローマ3:20同様、詩編143:2がある。

<sup>67</sup> 「わたしたち自身も罪人であることが明らかになった」は、*heurethēmen kai autoi hamartōloi, heurethēmen*（1 aor. 受動相、1人称、複数）＜*heuriskō*「発見する、探し出す、尋ね当てる」。受動相で、当該の事実が「明らかになる」意味を表すことがあり、ここは、その用例。パウロのこの発言の背景には、彼に反対して律法遵守を求めるユダヤ人宣教者たちが、パウロを律法に違反する者として非難した事態があるだろう。佐竹、222～223頁、山内、151頁、参照。

<sup>68</sup> 「わたしが解体したもの」は、*ha katelysa*。複数形であることを重視すれば、神の意志の体現としての律法ではなく、伝統的ユダヤ教において遵守すべきものとされた割礼や食事規定等の諸条項の可能性があるだろう。「再びわたしが建てる」は、*tauta palin oikodomō*。もちろん、それら諸条

たしは神に対して生きるために、律法をとおして、律法に対して死んだ<sup>69</sup>からです。キリストと一緒に、わたしは十字架につけられている<sup>70</sup>のです。20 もはや、わたしが生きているではありません。わたしの中でキリストが生きている<sup>71</sup>のです。今、わたしが肉において生きているということは<sup>72</sup>、わたしが神の子の信仰によって<sup>73</sup>生きているのです。この神の子は、わたしを愛し、わたしのためにご自身を引き渡しました<sup>74</sup>。21 わたしは、神の恵みを無効にはしません。というのは、もし、律法をとおして義が成り立つなら、キリストは無駄死にしたことになってしまう<sup>75</sup>からです。

### 3

#### <霊の受領の根拠>

1 ああ、無分別なガラテヤの人々よ、誰があなたがたを魔力の餌食にした<sup>76</sup>のですか。あなたがたの目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿で公に示された<sup>77</sup>と

---

項を再度遵守すること。それは、まさしく、エルサレム会議における確認事項を自ら破棄することにほかならない。反対者たちの要求は、そうした破棄だとパウロは主張する。

<sup>69</sup> ローマ 6 : 10、参照。

<sup>70</sup> ローマ 6 : 6、8、参照。

<sup>71</sup> ローマ 8 : 10、参照。

<sup>72</sup> 「今、わたしが肉において生きているということは」は、*ho de nyn zō en sarki*。敢えて、ほとんど直訳した。

<sup>73</sup> 「神の子の信仰によって生きている」は、*en pistei zō tēi tou hyiou tou theou*。この場合の「神の子の信仰」も、16 節の「イエス・キリストの信仰」や「キリストの信仰」同様、ローマ 3 : 22 の「イエス・キリストの信仰」から理解するのが望ましいであろう。つまり、「イエス・キリストの」は主格的属格。

<sup>74</sup> 本節の中ほど「今」以降は、敢えてギリシア語原文に可能な限り近い順番で訳した。それは、原文の *ho de nyn zō en sarki, en pistei zō tēi tou hyiou tou theou* における、下線部の対比を少しでも訳文に反映させたかったからである。通常は、「神の子」にかかる修飾句「わたしを愛し、わたしのためにご自身を引き渡した」を「神の子」の前にもってきて訳す。

<sup>75</sup> 「無駄死にしたことになってしまう」は、*ara .....dōreān apethanen*。*ara* は、論理的帰結を表す不変化詞。*dōreā* は、ここでは「無駄に、無益に」(副詞)。

<sup>76</sup> 「魔力の餌食にした」は、*ebaskanen* (1 aor. 3 人称、単数) <*baskainō* 「魔法をかける」この動詞の背景には、古代における魔術的世界観がある。古代の人々は、自分たちに対して敵意を持つ不可視の多くの存在に取り囲まれて生活していることを実感していた。例えば、実際に邪視や不吉な言葉によって、危害を被ると信じられていた。悪意ある眼(凶眼、邪視)や悪意ある言葉は、一種の魔力を持つものとして恐れられたのである。この部分は、「魔法にかけた」という直訳よりもパウロの否定的・批判的ニュアンスを重視して、このように強く訳した。cf. “*baskainō*” by Delling, *TDNT*, vol. I, 1979<sup>10</sup>, 594f, “EVIL EYE” by Dov Noy, *Enc. Jud.*, vol. 6, 1971, 997~1000., Betz, p. 131、原口、124~125 頁、サムエル上 18 : 9、参照。原口訳は「誰があなた方に魔術を掛けたのか」。ただし、注解の部分では「誰があなた方に魔法を掛けたのか?」とも訳している。「惑わした」(協会訳、新共同訳)、「まどわした」(佐竹訳、山内訳)、「迷わせた」(新改訳)、「たぶらかした」(蓮見訳)は、いずれも魔術のニュアンスが出ない。論争において、成果を上げる反対者の活動を、魔術を使っているとして非難するのは、ヘレニズム世界では常套手段だったと言われる。原口、参照。

<sup>77</sup> 「公に示された」は、*proographē* (2 aor. 受動相、3 人称、単数) <*prographō* 「前もって書く、

いうのに。2 これだけは、あなたがたから、聞いて確かめたい。律法の業に基づいて、あなたがたは霊を受けたのですか、それとも、信仰の説教に基づいて<sup>78</sup>、ですか。3 そんなに、あなたがたは無分別なのですか。あなたがたは霊で始めたのに、今、肉で完成しようとするのですか。4 あれほどのことを、あなたがたは無駄に経験した<sup>79</sup>のですか。実際、そんなことをしたら、本当に無駄になってしまいます<sup>80</sup>。5 では、あなたがたに霊を授け、あなたがたのあいだで力ある業をもって働く方<sup>81</sup>は、律法の業に基づいてそうするのですか、それとも、信仰の説教に基づいて<sup>82</sup>そうするのですか。

#### <アブラハムの子どもである信仰に依る人々>

---

公に通達する、公示する」等。「イエス・キリストが十字架につけられた姿で」について、1 コリント 1:23、参照。

<sup>78</sup> 「信仰の説教に基づいて」は、*ex akoēs pisteōs*。 *akoē* には、基本的に「聞くこと」、「聞かれたこと」を意味し、そこから、傾聴、噂や評判、説教や教説などと訳されることになる。最大限くだけた訳をしてみると、「律法を行なったから、あなたがたは霊を受けたのですか、それとも信仰を聴いたからですか」という可能性も十分ある。2:16 も参照。

<sup>79</sup> 「無駄に経験した」は、*epathete eikē*。 *epathete* (2 aor. 2 人称、複数) <*paschō* 「経験する、体験する、苦しみを受ける」。

<sup>80</sup> 「実際、そんなことをしたら、本当に無駄になってしまいます」と訳したのは、*ei ge kai eikē*。佐竹、山内が指摘するように、動詞が省略されていて種々の解釈が入り込む余地があることは確かである。わたしの解釈は、*ei ge* と *kai eikē* に分けて読むことを提案するものである。*ei ge* は、「もし……ならば」、「実際に……ならば」を意味するから、3 節の問いの末尾にある *nyn sarki epiteleisthe* を補い、「実際、今、あなたがたが肉で完成するならば」と読み、他方、*kai eikē* は、当然、直前の問いの中にある *epathete* を補い「無駄に経験した (ことになってしまう)」と読むのである。*ei ge (nyn sarki epiteleisthe,) kai (epathete) eikē* として読むわけである。前後の文脈から、こう読むのが望ましいはずである。つまり、原文で言えば、*ei ge* が条件節、*kai eikē* が帰結節になる。したがって、佐竹訳(「そうだ、[その調子では] 無駄にだ」)はまだしも、山内訳(「本当に無駄にである」)は、原文の *ei ge* のニュアンスを訳し切れていないように感じる。“If so, it really was in vain”(Betz)、参照。マテラは、“If they really were in vain.”と訳して、「これが当該のギリシア語の逐語訳だ」と言うが、それはむしろ嘘と言うべきである。“If it really was for nothing.”(NRSV)も、やはり少なくとも原文の微妙なニュアンスを訳文に反映しているとは言いがたい。ちなみに、「まさか、むだではあるまい」(協会訳)、「まさかむだではありますまい」(フランススコ会聖書研究所訳)、「万が一にもそんなことはないでしょうが」(新改訳)、「無駄であったはずはないでしょうに……」(新共同訳)、「無益に経験した筈はないであろう」(原口訳)、「確かに無駄になっています」(本田訳)、「きっと無駄だったのでしょう」(蓮見訳)は明らかに誤訳。「そんなことがあり得ると思うのか」(柳生訳)に至っては、意識でも敷衍訳でもない。わたしの解釈では、この四つの単語で構成されている短い文章は、「条件節だけから構成されており、帰結節を欠いた破格構文である」(原口、130 頁)とは思われない。文法的に省略はあっても、破格は極めて稀だ、という前提で原文は読むべきなのである。「それが事実なら、無駄なことだったろう」(バルバロ訳)は、さすがに見事。脚注にも、的を射た説明がなされている。

<sup>81</sup> 「力ある業をもって働く方」は、*ho .....energōn dynameis*。

<sup>82</sup> 3:2、参照。この箇所も、「あなたがたが律法を行なうからそうするのですか、それとも、信仰を聴くからそうするのですか」の可能性も十分ある。

6 アブラハムは「神を信じた。そしてそれが彼に対して義と認められた」<sup>83</sup>とあるとおりです<sup>84</sup>。7 だから、信仰に依る人々<sup>85</sup>こそアブラハムの子どもたちである<sup>86</sup>と知りなさい。8 聖書は、信仰に依って異邦人を神が義とすることを予見して、アブラハムに「あなたによって、異邦人はすべて祝福されるであろう」<sup>87</sup>と前もって福音を伝えた<sup>88</sup>のです。9 それゆえ<sup>89</sup>、信仰に依る人々は、信じる人アブラハム<sup>90</sup>と一緒に祝福されています。

#### <キリストによる律法の呪いからの解放>

10 というのは、律法の業に依る人々は誰でも、呪いのもとにあるからです。というのも、「律法の書の中に、行なうように書かれている事柄すべてを忠実に守らない人<sup>91</sup>は、すべて呪われている」<sup>92</sup>と書かれているからです。11 律法にあつては、誰ひとり神の前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「義しい人は信仰によって生き

<sup>83</sup> LXX 訳創世記 15 : 6、ローマ 4 : 3、参照。後者は、「聖書はどう言っていますか。『アブラハムは神を信じた。そしてそれが彼に対して義と認められた』のです」。パウロは、同じ言葉をわれわれの箇所です引用するに当たって、episteusen de Abraam tōi theō kai...の部分から de を省き、Abraam を前に出した。

<sup>84</sup> Kathōs で導かれる本節は、5 節の問いが予想する答えに対する旧約聖書の根拠を例示しているが、次の 7 節に ara 「だから」とあるように、同時に 5 節と 7 節とを橋渡しする機能を果たしている。

<sup>85</sup> 「信仰に依る人々」は、hoi ek pisteōs. 「信仰に基づく人々、信仰に依拠する人々」等も可能。

<sup>86</sup> ローマ 4 : 16、参照。

<sup>87</sup> LXX 訳創世記 12 : 3 は、eneulogēthēsontai en soi panta hai phylai tēs gēs. 「地上の全部族があなたに依って祝福されるであろう」。ただし、パウロは hai phylai tēs gēs 「地上の部族」に換えて同 18 : 18、22 : 18、26 : 4 に出る ta ethnē tēs gēs 「地上の諸国民（諸民族）」を用い、さらに tēs gēs 「地上の」を省いている。なお、ta ethnē は、パウロ当時、一般に「異邦人」を意味した。

<sup>88</sup> 「前もって福音を伝えた」は、proeuēngelisato (1 aor. 中動相、3 人称、単数 <proeuangelizomai <pro+euangelizomai 「よい知らせを伝える」。

<sup>89</sup> 「それゆえ」と訳したのは、hōste. 原口は、目的・意図を表すと解し「…（祝福を受ける）ため」とする。

<sup>90</sup> 「信じる人アブラハム」は、tōi pistōi Abraam. 「信仰の人アブラハム」（新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳）、「信仰に生きたアブラハム」（佐竹訳、山内訳）、「Abraham the believer」(Betz), 「Abraham who believed」(NRSV), 「faithful Abraham」(NEB, REB, Martin, Matera), 等。

<sup>91</sup> 「律法の書の中に、行なうように書かれている事柄すべてを忠実に守らない人」は、hos ouk emmenei pāsin tois gegrammenois en tō bibliō tou nomou tou poēsai auta. emmenō は、与格を支配して「…に服す」、「…に従う」、「…を忠実に守る」等の意。tou poiēsai auta は、「それらを行なうように」を表す不定詞句。auta 「それらを」は、ta gegrammena (tois gegrammenois の対格)。より直訳的には「それらのことを行なうように（命じる）律法の書の中に書かれている事柄すべてを……」。

<sup>92</sup> LXX 訳申命記 27 : 26 は、Epikataratos pās anthrōpos, hos ouk emmenei en pāsin tois logois tou nomou toutou tou poēsai autous. われわれの箇所では、「anthrōpos,」および「emmenei」の直後の「en」が省かれ、「logois」が「gegrammenois en tō bibliō」に、また、末尾の「autous」が文法上の性に合わせて、「auta」に換えられている。なお、そのような改変のヒントは、申命記 28 : 58 に出る「panta ta rēmata tou nomou toutou ta gegrammena en tō bibliō」や、30 : 10 に出る「tās gegrammenās en tō bibliō tou nomou toutou」であろう。

る」<sup>93</sup>からです。12 また、律法は、信仰に由来してはいません。むしろ、「それらを行なう者は、それらによって生きるであろう」<sup>94</sup>。13 キリストは、わたしたちのために<sup>95</sup>呪いとなって、律法の呪いからわたしたちを贖い出したのです。なぜなら、「木にかけられたものはみな、呪われている」<sup>96</sup>と書かれているからです。それは、アブラハムの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に達するためであり、霊という約束（の賜物）<sup>97</sup>をわたしたちが受けるためなのです。

#### <約束と律法>

15 兄弟のみなさん、人間に合わせた言い方をしましょう<sup>98</sup>。正式に作成された<sup>99</sup>人間の遺言でも、誰も決して無効にしたり、追加したり<sup>100</sup>はしないものです。16 ところで、約束はアブラハムと彼の子孫に伝えられました。（その際、神は）多くの人につい

<sup>93</sup> 原文は、ho dikaïos ek pisteōs zēsetai。LXX 訳ハバクク 2:4 からの引用。ただし、もとの原文は、ho de dikaïos ek pisteōs mou zēsetai。ちなみに、マソラ本文は「義しい人は、彼を信じることによって生きるであろう」の意。ローマ 1:17、参照。

<sup>94</sup> 原文は、ho poiēsās auta zēseati en autois。LXX 訳レビ記 18:5 からの引用。ただし、もとの原文は、(kai poiēsete auta,) ha poēsās anthrōpos zēsetai en autois。先行する文章から切り離して引用するに際して、パウロは、anthrōpos を省く代わりに冠詞 ho を先頭に出し、関係代名詞 ha を人称代名詞の代用としての強意代名詞 auta に換えた。

<sup>95</sup> 「わたしたちのために」は、hyper hēmōn。同時に「わたしたちの代わりに、わたしたちの代わりとなって」をも意味する。この背景には、われわれのために為されたキリストの代理的死という、パウロ以前に遡る初期教団の信仰告白定式がある。

<sup>96</sup> LXX 訳申命記 21:23 からの引用。パウロの引用文は、epikataratos pās ho kremamenos epi xylou。これに対し、もともとの文章は、kekatēramenos hypo theū pās kremamenos epi xylou。引用に際して、「律法の呪い」を強調する彼は hypo theou 「神によって」を省き、さらに、kekatēramenos（受動相、現在完了分詞、男性、単数、主格<kataraomai 「呪う」）を epikataratos に換えた。これは、そして、10 節における申命記 27:26 からの引用句にある epikataratos に合わせたものであろう。佐竹、295 頁、注 1、参照。（ちなみに、山内は、佐竹の注記の内容を本文で説明するが、佐竹の注における説明を本文に移して説明するのは、山内がしばしば駆使する方法である。）この引用句に関しては、原口、147～148 頁も参照。

<sup>97</sup> 「霊という約束（の賜物）」は、tēn epangeliān tou pneumatōs。直訳では「霊という約束」。アブラハムを祝福した神の約束が、「霊の約束」と言われている。ただし、内容的にはむしろ「約束された霊」の方が理解しやすいので、「約束された“霊”」（新共同訳）、「約束された御霊」（協会訳）、「約束された霊」（フランシスコ会聖書研究所訳）などと、従来は訳されてきた。他に「霊という約束された賜物」（佐竹訳）、「霊という約束のたまもの」（山内訳）。

<sup>98</sup> 「人間に合わせた言い方をしましょう」は、kata anthrōn legō。ローマ 3:5、参照。類似表現は、1 コリント 9:8、参照。「人間的な言い方をしましょう」も可能。

<sup>99</sup> 「正式に作成された」は、kekyrōmenēn（受動相、現在完了分詞、女性、単数、対格）<kyrō 「（法的に有効なものとして）正式に作成する」。続いて出る「無効にする」、「追加する」と並んでヘレニズム世界の法律用語。背景にヘレニズムの法律があるのか、ユダヤ法があるのかをめぐる複雑な問題については、佐竹、301～303 頁、参照。

<sup>100</sup> 「無効にしたり」は、athetei<atheteō 「無効にする、無効宣告を下す、廃棄する」。「追加したり」は、epidiatassetai<epidiatassomai 「追加する」。ただし、追加は、むしろ遺言を変更する行為と見なされる。佐竹、303 頁。参照。「変更を加えたり」（原口訳）。

て（言う）ように、「そして子孫たちに」とは言わず、一人の人について（言う）ように、「そしてあなたの（一人の）子孫に」と言っています<sup>101</sup>。この一人の子孫こそ、キリストなのです。17 次のことを、わたしは言っているのです。つまり、神によって前もって正式に作成された契約<sup>102</sup>を、四百三十年後にできた律法が無効にして、その結果、約束を取り消す<sup>103</sup>などということはありません。18 というのは、もし、相続が律法に由来するなら、それはもはや約束に由来するものではありません。しかし、アブラハムに対して、約束をとおして、神は恵みを賜った<sup>104</sup>のです。

19 では、律法とは何でしょうか。それは、諸々の違反を目的にして<sup>105</sup>、約束されているあの子孫が到来するまでの間、付け加えられたもので、天使たちをとおして<sup>106</sup>仲介者の手で制定されました<sup>107</sup>。20 ところで、そもそも仲介者というは、一人の人に属するものではありません。しかし、神は一人です。21 それでは、律法は、[神の] 約束に反するものでしょうか。断じて否、です。というのは、もし、人を生かす力がある<sup>108</sup>律法が与えられていたのであれば、現実には、律法に基づいて、義が生じていたはずだからです<sup>109</sup>。22 しかし、聖書は、あらゆるものを罪の支配下に一緒に閉じ込めました<sup>110</sup>が、それは、約束<sup>111</sup>がイエス・キリストの信仰に基づいて、信じる人々に与えられるためでした。

---

<sup>101</sup> LXX 訳創世記 15 : 13、参照。soi dōsō autēn kai tōi spermati sou。他に、同 17 : 8、24 : 7、参照。パウロの論証は、本当は的外れである。sperma 「子孫」は集合名詞だから、単数形を理由に「一人の子孫」を主張するのは馬鹿げている。

<sup>102</sup> 「前もって正式に作成された契約」は、diathēkēn prokekyrōmenēn hypo tou theou。本節冒頭の touto de legō 「次のことを、今わたしは言っているのです」が、ここでの議論を前半（「人間的な言い方をしましょう」で導入されている部分）と後半とに分けている。前半部で「遺言」として語られた diathēkē が後半では、「契約」として語られる。この部分に出る prokekyrōmenēn は、15 節に出た kekyrōmenēn に接頭辞 pro 「前もって、あらかじめ、先立って」がついたもの。

<sup>103</sup> 「取り消す」と訳したのは、to katargēsai (1 aor. 不定法) <katargeō 「無効にする、破棄する、取り消す、取り除く、減らす」。

<sup>104</sup> 「恵みを賜った」は、kecharistai (現在完了、3 人称、単数) <charizomai <charis 「恵み、恵みの賜物、恩恵、好意」等。

<sup>105</sup> ローマ 4 : 15、参照。「諸々の違反を目的にして」は、tōn parabaseōn charin。

<sup>106</sup> 使徒言行録 7 : 53、参照。

<sup>107</sup> 本節の主動詞は、prosetethē 「付け加えられた」。「制定された」と主動詞のように訳したのは、diatageis (2 aor. 分詞、受動相、男性、単数、主格)。

<sup>108</sup> 「人を生かす力がある」は、ho dynamenos zōiopoiesai。zōiopoieō は、「いのちを与える」も可能。ただし、同じ仮定文の中に edothē (1 aor. 受動相、3 人称、単数 <didōmi 「与える」) があるので、重複を避けて「人を生かす」と訳した。

<sup>109</sup> 「現実には、律法に基づいて、義が生じていたはずだ」と訳したのは、ontōs ek nomou an ēn hē dikaiosynē。

<sup>110</sup> 「一緒に閉じ込めました」は、synekleisen (1 aor. 3 人称、複数) <synkleiō 「一緒に閉じ込める、(魚を) 一網打尽にする」。次節の 23、ローマ 11 : 32、参照。ルカ 5 : 6 は「一網打尽にする」の用例。

<sup>111</sup> 「約束」は、14 節の「霊という約束 (の賜物) のこと」。

#### <養育係からの解放と信仰の到来>

23 しかし、信仰が到来する前は、わたしたちは律法の支配下で監視され、来るべき信仰が啓示される(とき)まで<sup>112</sup>一緒に閉じ込められていました。24 だから、律法は、キリスト(の到来)までの<sup>113</sup>、わたしたちの養育係だったのです。それは、わたしたちが信仰に基づいて義とされるためです。25 しかし、信仰が到来したので、もはや、わたしたちは養育係<sup>114</sup>の支配下にはありません。26 というのは、あなたがたはすべて、キリスト・イエスにおける信仰をとおして<sup>115</sup>神の子だからです。27 というのも、キリストのものになるために洗礼を受けた限りで、あなたがたはみな<sup>116</sup>、既にキリストを着ているからです。28 ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男も女もありません。あなたがたは、すべて、キリスト・イエスにあって一つだからです。29 もし、あなたがたがキリストに属する<sup>117</sup>なら、アブラハムの子孫であり、約束に適った相続人<sup>118</sup>なのです。

#### 4

1 いいですか<sup>119</sup>。相続人がまだ未成年者の間は、すべての相続財産の所有者であつても、奴隷と何ら異ならず、2 父親によって前もって定められた期日までは、後見人と管理人の下にあります。3 これと同じように、わたしたちも、未成年だったときには、

<sup>112</sup> この部分は、原文の語順を生かすために、主動詞と分詞の訳し方を若干変則的にした。文章全体の主動詞は *ephrouroumetha* 「わたしたちは監視されていました」。後半部の原文は、*synkleiomenoi eis tēn mellousan pistin apokalypthēnai*。直訳すると、「来るべき信仰が啓示されるまで一緒に閉じ込められつつ」。4:2、ローマ 11:32、参照。

<sup>113</sup> 「キリスト(の到来)までの」は、*eis Christon*。内容的には、前節後半部の *eis tēn mellousan pistin apokalypthēnai* と置換可能。

<sup>114</sup> 1 コリント 4:15、参照。

<sup>115</sup> パウロは、28 節末尾に出る *pantes (gar) hymeis heis este en Christōi Iēsou* 「あなたがたはすべて、キリスト・イエスにあって一つ(だから)です」と並行する文言 *pantes (gar) hyioi theou este en Christōi Iēsou* 「あなたがたはすべて、キリスト・イエスにあって神の子(だから)です」に *dia tēs pisteōs* 「信仰をとおして」という解釈句を挿入した。この信仰は、「われわれの」信仰ではなく、「イエス・キリストの」信仰であろう。「信仰の到来」と言われるときの信仰と同じであり、イエスが十字架上で血と死をもって実現した彼自身の神への信仰(信頼)を指す。この信仰理解は、ガラテヤ書とローマ書において、展開されている。われわれは、彼のそのような信仰をとおしてのみ、神の子とされ得る。これがパウロの理解であろう。

<sup>116</sup> 「キリストのものになるために洗礼を受けた限りで、あなたがたはみな」と訳したのは、*hosoi (gar) eis Christon ebaptisthēte*。 *eis Christon* が訳しにくい箇所。若干冗長を覚悟で、*hosoi* のニュアンスを含めて工夫を凝らした。

<sup>117</sup> 「キリストに属する」は、*Christou*。

<sup>118</sup> 「約束に適った相続人」は、*kat' epangelian klēronomoi*。

<sup>119</sup> 「いいですか」は、*Legō de*。直訳は「そこで、わたしは言います」。「では、言いましょう」。もちろん、意識である。



世界の諸々の要素<sup>120</sup>の支配下に隷属させられていました。4 しかし、時の充満が到来したとき、神はご自身の子を派遣しました<sup>121</sup>。彼は女から生まれ、しかも、律法の支配下に生まれたのです。5 それは、律法の支配下にある人々を贖い出すため、わたしたちが養子としての身分を<sup>122</sup>いただくためでした。6 あなたがたは子ですから、神は、「アッバ」つまり「父よ」<sup>123</sup>と叫ぶ、ご自身の子の霊をわたしたちの心の中に派遣してくださったのです。7 それゆえ、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子なのです。また、子であれば、神よる相続人<sup>124</sup>でもあるのです。

#### <ガラテヤの人々に対するパウロの懸念>

<sup>120</sup> 「世界の諸々の要素」と訳したのは、ta stoicheia tou kosmou。4:9; コロサイ 2:8、20、参照。stoicheia の元来の基本的な意味は、基礎的構成要素とでもいうべきもので、①学問や知識の基礎・基礎的原理・初步、②万物を構成する根源的な要素（地・水・風・火：四大、四大精霊）、③人間に敵対していると恐れられた宇宙や星辰、等の複合的な意味を持つ。フィロンは、火をヘーファイストス、風をヘーラー、水をポセイドーン、地をデーメーテルとして崇める人々について報告しているし（『観想的な生活について』*de Vita Cont.* 3）、ガラテヤ地方でも当時、大地母神（Magna Mater）キュベレ信仰が盛んだったが、隣接するフリュギアのペッシヌスでは、豊穡の大地母神（Magna Mater）キュベレの神殿で、エジプトから到来した女神イシスが「神々の母、ペッシヌス人の女神」として崇められていて、しかもイシスは「あらゆる諸元素の女王」（*elementorum omnium domina*）でもあった（アプレイウス『変身物語』*Metamorphoses* 11.5）。なお、当時の東地中海世界がいかにシンクレティズムによって刻印されたかについては、H・ケスター（井上大衛訳）『新しい新約聖書概説 上 ―ヘレニズム時代の歴史・文化・宗教―』新地書房、1989年、187～271頁、参照。当時、世界を構成する諸要素も神々として崇められ、同時に宇宙の星辰も世界とそこに住む人々を運命的に支配する神々として畏れられ、崇められていたのである。プラトンの傾向を強めるストア主義という当時の宗教的基盤の上に、占星術と運命論が時代を支配し、人々はもがき苦しみながら生きていたと言っている。Martin, pp.393～400、も参照。ディオゲネス・ラエルティオスによる、四つの stoicheia（構成要素）に関する次の記述も参照。「火は最も高い場所を占めており、そのような火はアイテールとも呼ばれているのであるが、そのアイテールのなかで諸恒星の天球が生み出され、次いで、諸惑星の天球が生み出されるのである。」しかも、その少し後で、彼は、アイテールの最も純粋な部分が宇宙の統括的部分である、というクリュシッポスの言葉を伝え、さらに、この部分はストア派が「第一（本来）の神」と呼んでいるものだ、と述べている。加来彰俊訳『ギリシア哲学者列伝（中）』岩波文庫、1995<sup>7</sup>（1989）年、311～313頁（第7巻、137、139）、参照。W・カーも、パウロが考えていたのは、諸々の霊的な力がその住处としている、人間の生活を支配する諸惑星であろう、としている。Cf. W. Carr, *Angels and Principalities*, SNTS Monograph Series 42, CUP, 1981, pp.72f. 日本語訳は、「この世のもろもろの霊力」（協会訳）、「世を支配する諸霊」（新共同訳）、「宇宙の構成にたずさわる諸霊」（フランシスコ会聖書研究所訳）、「宇宙の諸力」（佐竹訳、青野訳）、「世界の諸力」（山内訳）、「世界の諸要素」（原口訳）、「この世の霊力」（蓮見訳）、「この世の幼稚な教え」（新改訳）、「世間一般のはなはだ幼稚な宗教観」（柳生訳）、「この世の序列」（本田訳）。新改訳、柳生訳は「不適切。本田訳は誤訳。

<sup>121</sup> 「派遣しました」は、*exapesteilen*（1 aor. 3 人称、単数）<*exapostellō*。続く6節にも出る。

<sup>122</sup> 「養子としての身分を」は、*tēn hyiothesiān*。ローマ 8:15、23; 9:4、エフェソ 1:5、参照。*tēn hyiothesiān apolabōmen* で、「養子としていただく」と訳すことも可能。

<sup>123</sup> 「『アッバ』つまり『父よ』」は、*abba ho patēr*。通常は「アッバ、父よ」と一緒に訳されるが、*ho patēr* を *abba* の説明として訳した。

<sup>124</sup> 「神による相続人」は、*klēronomos dia theou*。意味としては「神によって定められた相続人」。

8 しかし、かつて、あなたがたは神を知らずに、本性上神ではない神々に<sup>125</sup>隷属していました。9 しかし、今あなたがたは神を知っているのに、いや、むしろ、あなたがたは神によって知られているのに、なぜ、再び、あの弱々しくみすぼらしい諸々の要素<sup>126</sup>に逆戻りして、またもう一度、それらに隷属しようと望むのですか。10 日、月、季節、年（などの暦）を、あなたがたは注意して守っています<sup>127</sup>が、11 わたしは、もしかして、あなたがたのために無駄に骨を折ったのではないか<sup>128</sup>、と恐れています<sup>129</sup>。

12 わたしのようにになりなさい<sup>130</sup>。わたしもあなたがたのようになったのですから、兄弟のみなさん、お願いします。あなたがたは、わたしに何一つ不正なことはしませんでした。13 あなたがたも知っているとおり、以前、わたしは肉体の弱さのお陰で<sup>131</sup>あなたがたに福音を伝えました。14 そのとき、あなたがたは、わたしの肉体にあったあなたがたの試練を軽蔑もせず、忌み嫌って唾を吐き出すこともせず<sup>132</sup>、むしろ、わたしをあたかも神の使いのように迎え入れてくれました。あたかもキリスト・イエスのように<sup>133</sup>、です。15 それでは、どこに、あなたがたの幸福はあるのですか。というのも、わたしはあなたがたに証言できるから<sup>134</sup>ですが、もし可能だったなら、あなたが

---

<sup>125</sup> 「本性上神ではない神々」は、*tois physei mē ousin theois*。physei は「本性において、本性上、生来」など。青野訳と同じ。「本性上神々でない神々」（佐竹訳）、「本来神々でない神々」（山内訳）と訳す必要はない。また、「本姓上神でないもの」（原口訳）は不明瞭。やはり、「本来神ならぬ神々」（協会訳）、「本来は神でない神々」（新改訳）、「本来神でない神々」（フランススコ会聖書研究所訳）、「もともと神でない神々」（新共同訳）のように訳すべきである。

<sup>126</sup> 「弱々しくみすぼらしい諸々の要素」は、*ta asthenē kai ptōcha stoicheia*。

<sup>127</sup> 「注意して守っています」は、*paratēreisthe*（中動相、2人称、複数）<*paratēreō*「注意深く観察する、注目する、様子をうかがう、見張る、気をつける、遵守する」等。なお、その前の「などの暦」は補足的説明。祭事暦か。

<sup>128</sup> 「もしかして、あなたがたのために無駄に骨を折ったのではないか」は、*mē pōs eikē kekopiaka eis hymās*。kekopiaka（現在完了、1人称、単数）<*kopiaō*「疲れ果てる、骨を折る、骨折って働く、懸命に働く、労苦する、難儀する、懲り懲りする」等。

<sup>129</sup> 「恐れています」は、*phoboumai*<*phobeō*「恐れさせる、怖がらせる、脅す」、中動相「恐れる、怖がる」、<*mē*+接続法の動詞>で「…ないか、と恐れる、心配する」等。通常は「心配です。心配しています」と訳されるが、「恐れる」のニュアンスを残して「心配でならない」（青野訳）とか「気が気でなりません」のように訳したい。

<sup>130</sup> 1 コリント 11:1、参照。

<sup>131</sup> 1 コリント 2:3、参照。

<sup>132</sup> 「忌み嫌って唾を吐き出すこともせず」は、*oude exeptysate*（1 aor. 2人称、複数）<*ekptyō*（唾を吐き出す、唾棄する）<*ek*+*ptyō*「唾を吐く、唾を吐き出す」。ekptyō は、ここでは、悪霊払いや厄除けのために唾を吐き出す行為を指す。パウロ自身も、自分の病を *skolops*「一つのとげ」、*angelos satanā*「サタンの使い」と呼んでいる。2 コリント 12:7、参照。当時、病は悪霊に憑かれた結果罹るものと信じられていた。

<sup>133</sup> マタイ 10:40、参照。

<sup>134</sup> 「わたしはあなたがたに証言できるから」は、*martyrō gar hymīn*。原文には、もちろん可能の動詞はないが、この種の表現の場合、日本語ではしばしば「…できる」が無意識的に挿入される傾向がある。

たは、自分たちの両目を抉り出して<sup>135</sup>、わたしに与えるほどだった<sup>136</sup>のです。16 わたしがあなたがたの敵になったのは、あなたがたに真理を語っているためですか。17 彼らはあなたがたを熱心に求めています、それは善い動機に基づくものではなく<sup>137</sup>、むしろ、あなたがたを閉め出そうと望んでいるのです、それは、あなたがたに彼らを熱心に求めさせるためです。18 しかし、いつも善い動機で<sup>138</sup>熱心に求められるのはよいことです。それは、わたしがあなたがたのところにいるときだけではありません。19 わたしの子どもたちよ<sup>139</sup>、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、再びわたしは産みの苦しみを味わっています。20 わたしは、今すぐ、あなたがたのところに行き、わたしの声の調子を変えて話したい<sup>140</sup>と思っています。あなたがたのことで、わたしは途方に暮れているからです。

#### <ハガルとサラの比喻>

21 わたしに言ってみなさい、律法の支配下にいたいと望む者たちよ、あなたがたは律法に耳傾けないのですか。22 というのは、(次のように)書かれているからです。すなわち、アブラハムは二人の息子を持っていた、女奴隷によって一人、そして自由人の女によって一人<sup>141</sup>、と。23 しかし、女奴隷による方は肉に従って<sup>142</sup>生まれました

<sup>135</sup> 「抉り出して」は、*exoryxantes* (1 aor.分詞、男性、複数、主格) <*exoryssō*「掘り出す、穴を開ける、抉り出す」。マルコ 2:4 で、中風の男を床に寝せて運んできた男たちが、イエスが大勢の人々に話している家にその男を運び込もうとしても、戸口まで人々が溢れていたので、やむなく、屋根に穴を開けて床ごとその男を吊り降ろした、という有名な箇所に出る。

<sup>136</sup> 古典ギリシア語と違って、事実と反する内容でも、1 aor.接続法、2 人称、複数形 (*dōte*) ではなく直説法 (*edōkate*) が使われている。ただし、変則的な古典語の形 (*edote*) ではなく、1 人称、単数形 (*edōka*) に基づく単純な変化形である。

<sup>137</sup> 「善い動機に基づくものではなく」は、*ou kalōs*。「善意からではない」(協会訳)、「善意からではありません」(新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳)、「善意で……のではなく」(原口訳)、「正しいものではありません」(新改訳)、「よい意味においてではない」(佐竹訳)、「よい意図においてではない」(山内訳)、「正当な理由からではありません」(本田訳)、等。ただし、パウロが言おうとしているのは、彼らの熱心が、単に「善意から出たもの」ではないということではなく、むしろ、「不純な動機に基づくもの」だという点にあるだろう。この部分に関しては珍しく柳生訳がよい(「正しい動機から」)。

<sup>138</sup> 「善い動機で」は、*en kalō*。「良いことについて」(協会訳)、「良いことで」(新改訳)、「善意から」(新共同訳、原口訳)、「善意からであるなら」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「善い意味において」(佐竹訳)、「よい意図において」(山内訳)、「良い〔思い〕において」(青野訳)、「正当な理由で」(本田訳)、「正しい動機から出た」等。

<sup>139</sup> 1 コリント 4:14、参照。

<sup>140</sup> 「変えて話したい」と訳したのは、*allaxai* (1 aor. 不定詞) <*allassō*「変える、代える、替える、変化させる」等。主動詞は文頭の *ēthelon* (未完了過去、1 人称、単数) <*thelō*。

<sup>141</sup> 創世記 16:15、21:2、9、参照。

<sup>142</sup> 「肉に従って」は、*kata sarka*。ここは、「人間的な判断に従って」の意。アブラハムは、「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」という神の約束を、「信じた」けれども、自分と妻の老齢のゆえに、妻サラの願いどおり、彼女の女奴隷ハガルとの間に第一子設ける決断をする。こうして、イシ

が、自由人の女による方は約束をとおして(生まれました)<sup>143</sup>。24 これらのこと<sup>144</sup>は、  
 比喩として言われています<sup>145</sup>。というのも、この女たちは、二つの契約なのですから。  
 一方はシナイ山に由来し、奴隷になる子を産みます<sup>146</sup>が、これがハガルです。25 しか  
 し、ハガル(という言葉)はアラビアではシナイ山のことで、今のエルサレムに当た  
 ります<sup>147</sup>。というのは、彼女がその子どもたちと一緒に奴隷となっているからです。  
 26 他方、上なるエルサレムは自由人の女ですが、彼女こそ「わたしたちの母」<sup>148</sup>なの  
 です。27 というのも、次のように書かれているからです。

「喜べ、子どもを生んだことのない不妊の女よ、  
 歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。  
 見捨てられた女の子どもたちは数多い、

---

ユマエルが生まれたのだが、それから、十三年ほど経つまで、アブラハムもサライもこのときの決  
 断が、神の意志に沿うものと信じていた。しかし、その決断が神の意志に反するものであることが、  
 二人の間にイサクが授けられることによって、明らかにされるのである。創世記 12 章以下のアブ  
 ラハム物語を参照。なお、拙論「創世記 15 章 6 節とパウロの *pistis* 理解」『日本カトリック神学会  
 誌』、第 17 号、2004 年、31～54 頁、参照。

<sup>143</sup> ローマ 9 : 7～9、参照。

<sup>144</sup> 「これらのこと」は、*hatina* (中性、複数、主格) <*hostis, hētis, ho ti* (関係代名詞)

<sup>145</sup> 「比喩として言われています」は、*estin allēgoroumena*。 *allēgoroumena* (現在、受動相、分詞、  
 中性、複数、主格) <*allēgoreō* 「何かを具象的・比喩的に表す、別の意味を隠して言う」 <*allo agoreuō*  
 「何かを別様に言う」。「比喩としてみられる」(協会訳)、「比喩があります」(新改訳)、「別の意味  
 が隠されています」(新共同訳、フランススコ会聖書研究所訳)、「隠れた意味があるのです」(本田  
 訳)、「比喩的な発言である」(佐竹訳)、「比喩である」(山内訳)、「アレゴリーとして語られている」  
 (原口訳)、「寓意物語であって」(柳生訳)。

<sup>146</sup> 「奴隷になる子を産みます」は、*eis douleian gennōsa*。直訳は「隷属へ向かって子を産む」。「奴  
 隷となる者を産む」(協会訳)、「奴隷となる子を産みます」(新改訳)、「子を奴隷の身分に産む」(新  
 共同訳)、「奴隷としての子を産む」(フランススコ会聖書研究所訳)、「奴隷の身分となる〔子を〕  
 産む」(青野訳)、「隷属させるために子を産む」(原口訳)等。

<sup>147</sup> 写本上の複雑な問題もあって、本節の意味は、議論されている。本文は、*To de Hagar Sinā oros...*、  
 写本によっては、*de* が *gar* になっているもの、*Hagar* が欠落しているもの、*Sinā* が欠落している  
 もの、等、ヴァリエーションがある。詳しくは、ネストレーアラント版の *critical apparatus* を見  
 よ。また、もともとの文章が本文どおりだったとして、*Hagar* がハガルそのものなのか、「ハガル」  
 という言葉なのか、*en tē Arabiā* が「アラビアでは」なのか、「アラビア語では」なのか。いずれ  
 にせよ、1 : 17 で、パウロは、彼が召命と呼ぶ出来事の後、誰にも相談せず、先輩の使徒に会いに  
 エルサレムにも上らず、アラビアまで出かけた、と記している。パウロは、アラビアに関する知識  
 をそれなりに持っていたとすれば、アラビア語で山や岩をハジャルと言うこと、また、ハガルの子  
 孫たちの土地であるアラビアにシナイ山があったことから、パウロがハガルとシナイ山を結びつけ  
 た可能性はあるものと思われる。「ハガル人」という言葉も参照(詩編 83 : 6)。「今のエルサレム」  
 がこのように否定的に評価されているのは、パウロの反对者も、ユダヤ教の考え方をそのまま踏襲  
 して「エルサレムはわたしたちの母」というスローガンを掲げていたためであろう。なお、エルサ  
 レムを母と呼ぶ例は、預言者(イザヤ 49 : 14～21、50 : 1、51 : 18、54 : 1、60 : 4 ; ホセア 2 : 4、  
 7 ; 4 : 5 等)、黙示文学(シリア語バルク 3 : 1 以下、IVエズラ 9 : 38～10 : 59 等)に見られる。  
 以上、cf. Jewett, "Agitators and the Galatian Congregation," *NTS* 17(1971), 201(198-212),  
 Matera, 169f, Martin, 437-439, 佐竹、430 頁、山内、274～276 頁、参照。

<sup>148</sup> 反对者たちのスローガンと見なして鉤括弧で括った。

夫を持つ女の子どもたちにも増して（多いのだから）」<sup>149</sup>。

28 ところで、兄弟のみなさん、あなたがたはイサクのように<sup>150</sup>約束の子どもたちです。29 しかし、当時、肉に従って生まれた者が、霊に従って（生まれた）者を迫害したように<sup>151</sup>、今もまたそれと同じ<sup>152</sup>です。30 しかし、聖書は何と言っていますか。「女奴隷と彼女の息子を追い出せ。というのは、女奴隷の息子は自由人の女の息子と一緒に決して相続してはならないからである」<sup>153</sup>、です。31 こんなわけで、兄弟のみなさん、わたしたちは奴隷女の子どもではなく、自由人の女の（子ども）なのです。

## 5

＜キリストのうちにある自由＞

1 この自由のために、わたしたちを、キリストは自由にしてくださったのです。だから、しっかり立っていなさい<sup>154</sup>。あなたがたは二度と奴隷の軛につながれてはいけません。2 見よ、わたしパウロがあなたがたに言いましょう。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストはあなたがたにとって何の役にも立たなくなってしまう

<sup>149</sup> LXX 訳イザヤ書54:1からの引用。ただし、パウロは、引用に際して、当該箇所末尾にある“eipen gar kyrios”を省いている。つまり、イザヤ書では「喜べ、子どもを産んだことのない不妊の女よ、歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。『見捨てられた女の子どもらは数多い、夫を持つ女の（子どもら）にも増して』と主は言われる」であり、後半部冒頭の hoti は、それに続く文章を『』で括ったように、末尾の「主は言われる」の内容を示している。しかし、「主は言われる」が省かれると、同じ hoti が、理由を表すものとして読まれることになる。なお、「見捨てられた女の」と訳したのは、tēs erēmou. erēmos は、「寂しい、荒れ果てた、荒れ野の、人里はなれた、人の住んでいない、打ち捨てられた」などの意味を持つ形容詞。ここでは、前半部の内容から推測されるように「子どもを産んだことのない、産みの苦しみを知らない」不妊の女を指し、サラと結び付けられている。したがって、その含意は「（神から）見捨てられた（かのように思われる）女」であり、創世記 17: 15～16 に記されている、妻サライがサラに改名される記事、特に「わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする」という約束を想起させるだろう。

<sup>150</sup> 「イサクのように」は、kata Isaak. 「イサクに従って」、「イサクにならって」、「イサクと同じように」も可能。

<sup>151</sup> LXX 訳創世記 21: 9、参照。サラが、息子イサクと戯れている (paizonta) イシュマエル（奴隷女ハガルが夫の間に産んだ第一子）を見た場面。「遊び戯れる」の意味だが、「馬鹿にする、笑いのにする、ひやかす、ふざける」等への連想からパウロが強引に「迫害」に結びつけたもの。

<sup>152</sup> 「…ように、今もまたそれと同じ」と訳したのは、hōsper……, houtōs kai nyn.

<sup>153</sup> 引用は、LXX 訳創世記 21: 10。ただし、もともとはアブラハムに対する妻サラの訴えで、パウロはその文章から意図的に若干の単語を省略し、末尾にある「わたしの」（直前の「息子」にかかる）「イサク」の代わりに「自由人の女の」を付加したのである。下線を付けた単語が省略された単語である。Ekbale tēn paidiskēn tautēn kai ton hyuon autēs ou gar klēronomēsei ho hyios tēs paidiskēs tautēs meta tou hyiou mou Isaak. 「あの奴隷女と彼女の息子を追い出してください。というのは、あの奴隷女の息子がわたしの息子イサクと一緒に相決して続してはならないからです」。「わたしの息子イサク」が「自由人の女の息子」に意図的に変更されている。

<sup>154</sup> 「しっかり立っていなさい」は、stēkete (2 人称、複数、命令) <stēkō 「立つ」。stēkō は histēmi の現在完了形に由来するヘレニズム的現在形。1 コリント 16: 13、参照。

でしょう<sup>155</sup>。3 わたしは、もう一度、割礼を受けている人すべてに証言しますが、そのような人は、律法をまるまる全部<sup>156</sup>行なう義務があります。4 律法によって義とされようとしているあなたがたは、キリストから解き放たれたことになり<sup>157</sup>、恵みから脱落したことになる<sup>158</sup>のです。5 というのは、わたしたちは、霊によって、信仰に基づいて、義の希望を（辛抱強く）待ち望んでいる<sup>159</sup>からです。6 というのは、キリスト・イエスにあれば、割礼も無割礼も何ら効力はなく<sup>160</sup>、（効力があるのは）むしろ、愛をとおして働く信仰（だけ）だからです。

7 あなたがたは、しっかり走っていました<sup>161</sup>。誰が、あなたがたを妨害し、真理に従わせないようにした<sup>162</sup>のですか。8 そんな勧誘<sup>163</sup>は、あなたがたを召し出している方からのものではありません。9 「わずかなパン種が練り粉全体を膨らませる」<sup>164</sup>のです。10 わたしは、あなたがたのことを、主にあって信頼しています。あなたがたは、決して、異なる思いを抱かないはずです。あなたがたを動揺させる者は、誰であっても、裁きを（その身に）引き受けるでしょう。11 しかし、兄弟のみなさん、このわた

<sup>155</sup> 「何の役にも立たなくなってしまうでしょう」は、ouden ōphelēsei. ōphelēsei（未来、3人称、単数）<ōpheleō「役立つ、支える」等。ちなみに、この単語は、次節に出る opheiletēs と語呂合わせになっている。

<sup>156</sup> 「律法をまるまる全部」は、holon ton nomon。

<sup>157</sup> 「解き放たれたことになり」は、katērgēthēte（1 aor. 2人称、複数）<katargeō「滅ぼす、無力にする、無効にする、解き放つ」等。「解放され」（佐竹訳）、「引き離された」（青野訳）、「離れてしまっている」（協会訳）、「離れ」（新改訳）、「離されてしまい」（山内訳）、「縁もゆかりもない者とされ」（新共同訳）等。

<sup>158</sup> 「脱落したことになる」は、exepesate（1 aor. 2人称、複数）<ekpiptō「落ちる、散る、効力を失う、無効になる」等。属格を支配して「…から落ちる、脱落する、…を失う」という意味になる。パウロでは、この他にローマ9:6に現在完了形（「神の言葉が散り落ちてしまった（無効になってしまった）」）で出る。

<sup>159</sup> 「（辛抱強く）待ち望んでいる」は、apekdechometha<apekdechomai「（辛抱強く）待ち望む」<apo+ekdechomai「待つ、期待する」。パウロは、（イエスの）信仰に依拠しつつ、霊によって、最終的に義とされるという終末論的希望のうちに生きるのが、キリストにあって生きる姿なのだ、と言う。

<sup>160</sup> 「…も…も、何ら効力はなく」は、oute...ti ischyei oute...。ischyō「力がある、効力がある」<ischys「力、力強さ」。

<sup>161</sup> 「あなたがたは、しっかり走っていました」は、etrechete kalōs. trechō「走る」は、ヘレニズム世界で一般化していた競技場での走者を念頭に置いた言葉。競争は、ディアトリバーでは周知のモチーフ。Betz, 264、参照。1コリント9:24~26、フィリピ2:16、3:14、参照。「競技場の中を走る人々は全員走ります。しかし、賞を獲得するのは一人だけです。同じように、あなたがたも、賞を得られるように走りなさい」（1コリント9:24）。

<sup>162</sup> 「妨害し、真理に従わせないようにした」は、enekopsen [tēi] alētheiāi mē peithesthai. Eenekopsen（1 aor. 3人称、単数）<enkoptō「妨害する、邪魔する」、peithesthai（現在、中・受動相、不定詞）<peithō「説得する」中・受動相で「聞き従う、従う」。

<sup>163</sup> 「そんな勧誘」は、hē peismonē<peithō「説得する、勧誘する」等。

<sup>164</sup> 「膨らませる」は、zymoi<zymō<zymē「酵母、パン種、イースト菌」。本節と全く同じ格言を、パウロは1コリント5:6でも引用している。

しが、もし、割礼を今なお宣べ伝えているとすれば、なぜ、今なおわたしが迫害されているのでしょうか。そんなことをしていたら<sup>165</sup>、十字架の蹟きは取り除かれている<sup>166</sup>はずです。12 あなたがたを扇動する者たち<sup>167</sup>は、いっそ、自分で去勢してしまうがいい<sup>168</sup>のです。

#### <霊の実と肉の業>

13 というのは、あなたがたは自由に向けて<sup>169</sup>召し出されたのです、兄弟のみなさん。ただ、この自由を肉の機会にさせずに<sup>170</sup>、むしろ、愛をとおして互いに仕え合いなさい。14 というのは、律法全体は、一つの言葉のうちに十全に満たされるからです。つまり、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という言葉のうちに<sup>171</sup>、です。15 しかし、もし、あなたがたが互いに噛み合い喰い合っているなら、互いに相手に滅ぼされてしまわないように<sup>172</sup>注意しなさい。16 いいですか<sup>173</sup>。霊に従って<sup>174</sup>歩みなさい。そうすれば、あなたがたは肉の欲望を満たさずに済むでしょう。17 というのは、肉は霊に反して欲望を抱き、霊は肉に反して（欲する）<sup>175</sup>からです。と

<sup>165</sup> 「そんなことをしていたら」と訳したのは、ara（不変化詞）。「本当に、わたしが今なお割礼を宣べ伝えていれば」。

<sup>166</sup> 「取り除かれている」は、katērgētai<katargeō。同じ動詞は、ガラテヤでは、他に、3：17「取り消す」、5：4「解き放たれた」。

<sup>167</sup> 「扇動する者たち」は、anastatountes（現在、分詞、男性、複数、主格）<anastatoō「扇動する、暴動を起こす、反乱を起こす」等。政治的扇動者を表す用語。パウロでは、ここだけに出る。新約聖書では他に、使徒言行録 17：6、21：38。LXX 訳ダニエル書 7：23 に anastatōsei autēn(= pāsan tēn gēn)として出る。マソラ本文を訳した新共同訳では「(全地を)踏みにじり」。cf. Betz, 270.

<sup>168</sup> 「いっそ、自分で去勢してしまうがいい」は、kai apokopsontai（未来、3人称、複数）<apokoptō「切り落とす、切り捨てる、去勢する」。本節は、反対者を揶揄するパウロの、極めて攻撃的で意地の悪いジョークである。cf. Betz, 270.

<sup>169</sup> 「自由に向けて」は、ep' eleutheriā。前置詞 epi は、ここでは与格を支配して「目標、目的、結果」を表す。「自由へと」（佐竹訳、青野訳、山内訳）、「自由のために」（原口訳）、「自由を得るため」（協会訳）、「自由を与えられるため」（新改訳）、「自由を得るために」（新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳）。英語の場合は、Betz のように “you were called to freedom” と訳せば済むのだが。

<sup>170</sup> 「肉の機会にさせずに」は、mē.....eis aphormēn tēi sarki。

<sup>171</sup> パウロは、LXX 訳レビ記 19：18 後半部の末尾の言葉 “egō eimi kyrios” を省いて、本節とローマ 13：9 に引用している。なお、ローマ 13：8～10、参照。

<sup>172</sup> 「滅ぼされてしまわないように」は mē.....analōthēte（1 aor. 受動相、接続法、2人称、複数）<analiskō「滅ぼす、飲み込む、喰い尽す」。新約聖書では、こことルカ 9：54 だけに出る。

<sup>173</sup> 4：1 と同じ Legō de。注 113、参照。

<sup>174</sup> 「霊に従って」は、pneumati。pneumati は dativus sociativus（共同関係を示す与格）。ただし、ニュアンスとしては、むしろ、「霊の導きに従って」の方が適切か。18 節の「あなたがたが霊に導かれている（なら）」とほぼ同意。「霊の指揮下に」（佐竹訳）。佐竹、507 頁、参照。

<sup>175</sup> 「欲望を抱き」は、epithymeī<epithymeō。「霊は」の後に同じ動詞が省略されているが、主語が「霊」なので、「（欲する）」としてある。

いうのも、両者は<sup>176</sup>、互いに対立し合っているのです、結果として<sup>177</sup>、あなたがたは、自分が望んでいることをできずにいることになる<sup>178</sup>からです。18 しかし、あなたがたが霊に導かれているなら、あなたがたは律法のもとにはいません<sup>179</sup>。19 肉の業は明らかです。すなわち、淫らな行為、汚れた行為、好色<sup>180</sup>、偶像礼拝、魔術<sup>181</sup>、敵意、争い、妬み、激怒、党派心、不和、分派、21 嫉妬、泥酔、酒宴、そしてこれらと同類のものです。それらのことを、わたしは、前もって言ったことがあるように、あなたがたに（今も）前もって言いましょう。これらのことを実際に行なう者たちは、神の支配を相続することはないでしょう<sup>182</sup>。22 他方、霊の実は、愛、喜び、平和、寛容<sup>183</sup>、慈愛、善意、誠実<sup>184</sup>、23 柔和、節制です。これらのものに、律法は反対しません。24 しかし、キリスト〔イエス〕のものである人々は、その肉を<sup>185</sup>、欲情や欲望と一緒に十字架につけたのです。25 もし、わたしたちが霊に従って生きているのであれば、霊に歩調も合わせて進もうではありませんか<sup>186</sup>。26 わたしたちは、虚勢を張

176 「両者は」と訳したのは、*tauta*。

177 「結果として」は、*hina* を訳したもの。

178 「自分が望んでいることをできずにいることになる」は、*mē ha eān thelēte tauta poiēte*。

179 「あなたがたは律法のもとにはいません」は、*ouk este hypo nomon*。「あなたがたは律法の支配下にはありません」も十分可能な訳。

180 「淫らな行為」は、*porneiā*。「淫乱」も可。「汚らしい行為」は、*akatharsiā*。「好色」は、*aselgeia*。*porneiā* は所謂 *moicheiā* 「姦淫、不貞」とは異なる、より広い概念。*akatharsiā* 「汚れ、不潔、不道徳」<*akathartos* 「汚れた、不潔な、不潔な、不純な」>*a+katharos* 「清い、淨い、潔い、純粋な」。「好色」は、*aselgeia*<*a+selgēs*。「放縦、享樂

181 「偶像礼拝」は、*eidōlolatriā*<*eidōlon* 「偶像」+*latreia* 「礼拝、神への奉仕、崇拜」。「魔術」は、*pharmakeiā* 「魔術、呪い」<*pharmakeuō* 「毒を用いる、呪文を唱える」>*pharmakon* 「魔術に用いるもの、毒、まじない、呪文」。

182 「神の支配を相続することはないでしょう」は、*basileiān theou ou klēronomēsousin*。*basileiā theou* は、福音書伝承では通常、*hē basileiā tou theou*、マタイでは、*hē basileiā tōn ouranōn* として出る。もちろん、*tou theou* 「神の」も *tōn ouranōn* 「天の」も、意味は同じである。「神の支配を相続する」という表現は、パウロのものであり、常に本節のように定冠詞抜きで用いられている。ない、「神の国を受け継ぐ」という訳が一般的。1 コリント 6:9、10; 15:50 (2度)、参照。特に、6:9~10 は本節同様、悪徳表の文脈の中に出る。「相続する (受け継ぐ)」は、マタイ 5:5、19:29、25:34、マルコ 10:17、ルカ 10:25、ガラテヤ 4:30 (旧約引用)、ヘブライ 1:4、14; 6:12、12:17、等に出る。

183 「寛容」は、*makrothymia*<*makros* 「長い、遠い」+*thymos* 「激情、怒り」)。つまり、長い間怒らずにいること、激情から遠くにあること。「寛容」の他に「忍耐、辛抱」など。

184 「誠実」は、「信仰」と同じ *pistis*。

185 「その肉を」*tēn sarx* と聞いたガラテヤの信徒たちが想起するのは、17 節の *hē (gar) sarx*.....であり、19 節の *phanera de estin ta erga tēs sarkos, hatina estin*.....であるはず。

186 「霊に歩調も合わせて進もうではありませんか」は、*pneumati kai stoichōmen*。*stoicheō* の語源としては、軍事用語が想定されており、「霊の指揮する隊列から離れずに整然と前進する」というようなニュアンスがあるかもしれない。また、パウロが、ここで他の動詞 (例えば、*peripateō*) ではなく、*stoicheō* を使った理由の一つとして、4:3 の *ta stoicheia tou kosmou* や 4:9 の *ta asthenē kai ptōcha stoicheia* と語呂合わせをしつつ、あの *stoicheia* ではなく、霊に *stoichōmen* 「歩調をあ



って、互いに挑発し合ったり、嫉妬し合ったり<sup>187</sup>しないようにしましょう。

## 6

＜互いに重荷を担い合いなさい—善を行ないなさい＞

1 兄弟のみなさん、もし、ある人が、何らかの過失で現場を取り押さえられることになっても<sup>188</sup>、霊的な人であるあなたがたは、柔和<sup>189</sup>の霊によって、そのような人を正しい道に立ち返らせなさい<sup>190</sup>。あなたも誘惑されないように、あなた自身用心しながら。2 互いに重荷を担い合いなさい<sup>191</sup>。そうすれば、あなたがたはキリストの律法<sup>192</sup>を十全に満たすことになるでしょう<sup>193</sup>。3 もし、誰かが、実際はそうではないのに、(自分を) ひとかどの者だと思っている<sup>194</sup>とすれば、その人は自分自身を欺いています。4 むしろ、自分自身の業を、各自吟味しなさい<sup>195</sup>。そうすれば、自分に向かってだけは誇りを持てるとしても、他人に向かっては持てないでしょう。5 というのは、各自が自分の重荷を担うはずだからです。

6 ところで、御言葉を教えてもらう人は、教える人に持っているものは何でも分け与えなさい<sup>196</sup>。7 惑わされてはいけません<sup>197</sup>。神が侮られることはないのです。とい

---

わせて歩もうではないか」と語りかけるという、彼が好むちょっとした遊びを上げることができるであろう。E.Plümacher による“stoicheō”の項目『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 III』、318～319 頁、参照。

<sup>187</sup> 「虚勢を張って」は、kenodoxoi。「互いに挑発し合ったり」は、allēlous prokaloumenoi (中動相、分詞、男性、複数、主格) <prokaleō。「互いに嫉妬し合ったり」は、allēlois phthonountes (能動相、分詞、男性、複数、主格) <phthoneō。なお、悪徳表のリストに phthonoi (21 節) が出ている。

<sup>188</sup> 「もし、ある人が、何らかの過失で現場を取り押さえられることになっても」は、eān kai prolēmphthēi anthrōpos en tini paraptōmati. prolēmphthēi (1 aor. 受動相、接続法、3 人称、単数) <prolambanō「先取りする、前もって用意する、事前に(食事を)とる、現場を押さえる」。ここは、「現場を取り押さえる」の意。

<sup>189</sup> 5:23、1 コリント 4:21、参照。

<sup>190</sup> マタイ 18:15、参照。

<sup>191</sup> ローマ 15:1、参照。

<sup>192</sup> 1 コリント 9:21、さらにローマ 3:27「信仰の律法」、また、ヨハネ 13:34、参照。

<sup>193</sup> 「十全に満たすことになるでしょう」は、anaplērōsete (未来、2 人称、複数) <anaplēroō「成就する、完全にする、満たす」。「キリストの律法」は、ton nomon tou Christou。

<sup>194</sup> 「ひとかどの者だと思っている」は、dokei.....einai ti。なお、2:6 には、tōn dokountōn einai ti「ひとかどの者と思われている人々」という表現が出ていた。また、1 コリント 8:2、使徒言行録 5:36、2 コリント 12:11 等、参照。

<sup>195</sup> 「吟味しなさい」は、dokimazetō (現在、命令、3 人称、単数) <dokimazō「試す、見分ける、検証する、吟味する、検討する、受け入れる」等。2 コリント 13:5、参照。

<sup>196</sup> 「持っているものは何でも分かち合いなさい」は、koinōneitō.....en pāsin agathois。この panta agatha は、抽象的・霊的な「善いもの」ではなく、むしろ「生活を支える所有物、財産」である。ローマ 15:27、1 コリント 9:14、参照。なお、ここに出る「御言葉を教えてもらう人」と「教える人」は、洗礼を受ける前の準備教育における成人求道者と教師であろう。佐竹、569～572 頁、

うのは、そもそも人間は、(自分で) 蒔いたものは(自分で) 刈り取りもするからです。8 すなわち<sup>198</sup>、自分の肉に蒔く者は、その肉から滅びを刈り取り<sup>199</sup>、霊に蒔く者は、その霊から永遠のいのちを刈り取る<sup>200</sup>ことになるでしょう。9 そこで、わたしたちは、良いことを行なうことに飽きて厭にならないようにしましょう<sup>201</sup>。というのは、疲れ果ててしまわずにいれば、然るべき時になると、わたしたちは刈り取るはずだからです。10 そういうわけだから、わたしたちに時がある間に<sup>202</sup>、すべての人に対して、特に信仰の家族である人々に対して、善いことを行ないましょう。

#### <結び—警告と祝福—>

11 見なさい。いかに大きな文字で、わたしがあなたがたに自分の手で<sup>203</sup>書いたかを。12 肉においていい顔をしたいと望んでいる<sup>204</sup>者たちはみな、あなたがたに強制的に割礼を受けさせようとしていますが、それは、専ら、キリストの十字架のせいで自分たちが迫害されることがないようにするためです<sup>205</sup>。13 というのも、割礼を受けている者たち自身、律法を守っていないからで、むしろ、彼らはあなたがたに割礼を受けさせたいと望んでいるのですが、それは、あなたがたの肉のことで、自分たちが誇るためなのです<sup>206</sup>。14 このわたしは、しかし、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇るものは断じてありません<sup>207</sup>。このキリストをとおして、わたしに対して世界が十字架につけられていますし、わたしもまた世界に対して(十字架につけられています)。15 だから、重要なのは割礼でも無割礼でもなく<sup>208</sup>、新しい被造物(とな

---

Betz, 304~306, Martin, 551f., Matera, 215、参照。

<sup>197</sup> 「惑わされてはいけません」は、*mē planāsthe* (現在、受動相、接続法、2人称、複数) <*planaō* 「迷わせる、惑わす、欺く」等。1コリント6:9、15:33、マタイ22:29、24:4、マルコ13:5、ルカ21:8等、参照。

<sup>198</sup> 「すなわち」は、*hoti*.....。佐竹訳に従って、結果を表す*hoti*として読む。理由を表すものとして読む青野訳(「というのは」)は、前後の文脈からして適切ではない。協会訳も「すなわち」。新共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳、新改訳、原口訳、本田訳は、*hoti*に関しては曖昧(明確に訳出していない)。

<sup>199</sup> ヨブ記4:8、箴言22:8、参照。

<sup>200</sup> ローマ8:6、13、参照。

<sup>201</sup> 2テサロニケ3:13、さらに、2コリント4:1、16、参照。

<sup>202</sup> エフェソ5:16、参照。

<sup>203</sup> 1コリント16:21、参照。

<sup>204</sup> 「肉においていい顔をしたいと望んでいる」は、*thelousin euprosōpēsai en sarki*。 *euprosōpeō* <*euprosōpos* <*eu* 「よい」 + *prosōpon* 「顔」

<sup>205</sup> 5:11、参照。

<sup>206</sup> 2コリント11:18、参照。

<sup>207</sup> 1コリント1:31「誇る者は主を誇れ」、さらにフィリピ3:3、参照。

<sup>208</sup> 1コリント7:19「割礼も無意味、無割礼も無意味、重要なのは神の戒めを堅く守ることです」、参照。

ること) <sup>209</sup>です。16 そして、この基準に従って整然と歩む<sup>210</sup>すべての人々の上に、すなわち、神のイスラエルの上に、平和<sup>211</sup>と憐れみが (ありますように)。

17 今後は、わたしに誰も面倒をかけないでほしい<sup>212</sup>ものです。というのは、このわたしは、イエスの焼印<sup>213</sup>をわたしのからだに負っている<sup>214</sup>からです。

18 あなたがたの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともに (ありますように) <sup>215</sup>、アーメン。

---

<sup>209</sup> 「新しい被造物 (となること)」は、*kainē ktisis*。「新しく創造された者」、あるいは「新しく創造されること」とも訳し得る。2 コリント 5 : 17、参照。

<sup>210</sup> フィリピ 3 : 16、参照。

<sup>211</sup> 「神のイスラエルの上に、平和」は、*eirēnē.....epi ton Israēl tou theou*。LXX 訳詩編 124 : 5、127 : 6、*eirēnē epi ton Israēl*、参照。なお、1 : 3 に「みなさんに恵みと平和」が出ていた。

<sup>212</sup> ルカ 11 : 7、参照。

<sup>213</sup> 「イエスの焼印」は、*ta stigmata tou Iēsou*。*stigma* は、所謂 *hapax legomenon*。

<sup>214</sup> 2 コリント 4 : 10、*tēn nekrosin tou Iēsou en tōi sōmati peripherontes*、「イエスの死をからだにまっています」、また、フィリピ 3 : 10、参照

<sup>215</sup> フィリピ 4 : 23、フィレモン 25、さらに 2 テモテ 4 : 22、参照。